

を痛く嫌ひたるより起りたる者なれど己の財産の僅少なる
 により止を得ず斯る笑ふべき處の儉約なる規則を設けしも
 のにして這は當に我慢心に迷ひて自己と波里衣入との間に
 此笑ふべく恠しむべき一種の習慣を組織せしものなり
 上等の種族人は斯の如き不儀なる特權を有するを頑固な
 る心得より最も限りなく之を愛するに於て若其人にして此
 種族中より追放せらるゝとあれば流刑などに處せられしと
 同様一犬難事として之に起たる苦しみなく故に種族より出
 されし者は止を得ず自らその土地を立去ざるを得ざるに
 て此定めは舊希臘羅馬の習慣に相似たる處にして同じ非
 より汲し水を飲み同じ火にて暖をとるとさへも許さず加之
 洗濯屋はその衣服を洗はず理髮店はその髪を剪となく下

僕もその食物を調理せざれば妻子には離れ朋友には捨られ
 誰願みる者もあらざれば止を得ず故郷を去りて他所に漂泊
 遂には貧窮にて餓死する域に到れるとあり
 この種族より追放せられる箇條といふは當に種族の守るべ
 き習慣を破り或ひは酒を飲或ひは不品行を致し親族の名を
 汚し又は國事犯等の事にて罰せられて其親族より出される
 事等なり而して唯暫時の間なる有期刑ありまた自らその種
 族より出るあり比喩は下等種族と共に職業を爲し或ひは下
 等種族より妻を娶り又はその料理爲たる物を食せし如死者
 はすべて其下等に陥る者なり
 併しペリオン Puriyon 師の書籍を讀に下等種族の婦人と猥褻の所
 業をなし或ひは下等種族に庸れ或は賤しき下等種族を世話

するも尙その種族權を失ふとなしとあり又曰く婆羅賀磨師にして余の下僕となり余のために下僕たるの賤しき業をどるとは更にその面目を失はぶるに思ひ却て余と共に職をなし或は余が手にて養たる食物を食するとは彼その生命を失ふも之を承諾せざるとなり其証據は或日ボンガヌール Pungahore の領主が余の邸を訪來りしとき余は何の思慮もなく葡荷園にある處の葡荷を採り來りて彼の前に持ゆきしに彼丁時^てに謝して且微笑して謂く若我同作の者がこれを採來りて我に出しなば我よく之を頂戴せんとて懇に謝絶たり云々と書載たりき

其習慣の嚴重なるは唯外面にのみ行はる、といふと一の面白き談話を讀たり即ち印度の領主がその家臣の一女子が

嫉妬にして傾國の容色あるに戀着し如何にもして之を娶んと欲したれども原來女は下等種族人の一女子なれば尋常の業にては其意を遂る能はざるを知り種々の工夫を凝し非常の手段を施し漸くその望を達したるもあり今その謀略を聞ふかの懸想したる婦人の親族を殘らず己が宮殿に召集め彼等の城中に入や直ちに城門を固く鎮し番兵を置てその去る路を断しめ強て彼等を其身の傍に着席せしめ山海の佳肴を出し彼等と共に食し大いに之を饗應たり斯彼等と交際を結びしゆゑにその下等種族人は皆悉く我と同じき種族に偏入するも能はずなり全く種族の區別は消滅せしを以て誰人も之を拒むと能はずなりぬ茲に於てその望みを達し遂にかの婦人を娶りて偕老を契るの許しを得たりといふ

尙印度にては種族權を我役に重んずるを説くに既に前にも
 記せし如く僅の事にも直ちに種族權を失ふにも拘らず軍
 務の上に於てはその士官は仮令如何なる賤しき種族より出
 る者といへども其士官の指揮に従ふべき例あり而して其
 之に従ふといふとも且にその種族權を失はざることをなり
 ペリン師其日記に書して謂く我ボンカノール Punjnore 阿跋耶
 (公)の軍陣中に波里衣人たる一士官に従がひし婆羅賀磨
 種族の兵卒を見たるが其兵卒が若その士官の命令に背くと
 きは士官は己が意に任せ杖をとりて二十乃至三十もこれを
 鞭撻せしむるも兵卒は慎んで之を耐忍びて毫も婆羅賀磨
 の面目を汚し穢したりとせず又この波里衣人たる士官は適
 宜にこれを鞭撻の權を有したりされど婆羅賀磨種族たる兵

卒はその種族の規則によりて仮令士官にもせよ波里衣人の
 許へ到りて之と俱に食するとは決して爲ざることなり
 斯の如き我愛心より其種族の權衡相容ざる無數の笑ふべき
 過りをなすに至れるなり
 印度人にして種族權を剝奪することは性命を失ふより尙
 甚だしき困難とする處なるが其中にもまた婆羅賀磨師の計
 ひにより此迷惑なる大困難を免がるゝの工夫ありこれ他な
 し金銀を以てするの策なり
 今を距る三十年前に婆羅賀磨師なるグヌグラム Gungram 氏が
 英國に來り數年間歐洲人と交際したる爲め其種族より放逐
 せられしが數千圓の罰金を婆羅賀磨祭司に納て再び元の如
 く種族權を回復するに至れり又他の婆羅賀磨師がセラノガ

ール *Barampore* 府よりマドラス *Madras* 府に旅行したるとき英國人
 と共に飲食せしむの隠れし爲に其種族權を剝奪んを爲たる
 を婆羅賀磨祭司に金千圓を賄賂て漸くにその罪を遁れしこ
 とありまた或とき英國よりカルクタ *Calcutta* 府を開くの節に英
 國或少將がその邸へ金満家にして名望ある一人の婆羅賀磨
 師を招きこれに強て牛肉及び酒を飲食させしとありしが其
 婆羅賀磨師は直ちに種族より棄られしを以てその罰を免が
 る、ため婆羅賀磨祭司に四千圓の金を贈りしも尙これを拒
 みて容ざるにより又その賄賂を倍になしたる後三年を経て
 漸くに其罪を許さる、とを得たり而してこれが爲に費やし
 たる賄賂の金額は一千六百萬圓の多額に及びたりとは實に
 驚くべきの限りといふべし尙この他にも或婆羅賀磨師は最

も卑賤なるフラーリ *Flaris* 種族人と共に飲食せしことあるを發
 見せられ其罰を免がれん爲に金二万五千圓を出して謝した
 り、又婆羅賀磨師なるシフゴーズ *Shingoso* 氏といふはその妻
 を下等種族人より娶りたるを以て全種族人より棄られしが
 三千五百圓の金を賄賂て七年の後に漸くその舊權に復する
 とを得たることあり曾てベナレス *Benares* 府に住む金満の婆羅
 賀磨師の母カリフロサント *Khalid Rosand* 婦が死したるに就てそ
 の子たる婆羅賀磨師が大に困難せしとあり其理由はこのカ
 リフロサントは常にマホメット *Mahomet* 教人と交際せしを以
 て向に全種族人より棄られ居りしゆゑ其子の婆羅賀磨師よ
 り母の葬式を執行せんためこの事を他の婆羅賀磨師に通知
 せしむ誰一人これを承諾する者なし茲に於てその子は大に

愛ひ歎きて莫大の金を全種族人に贈り切りにこれを歎願せ
 一より十一名の婆羅賀磨師は夜に紛れて鎗かに葬式に會し
 これを執行はしめたるより直ちに他の婆羅賀磨師に探知さ
 れ十一名とも皆悉くその種族より誅せられたるが内十名は多
 くの金を賄賂てその罪を免がれ一に一名は身貧にして賄賂
 の金なきため遂に河中に身を投して死したりとまた婦人等
 に於ては屢々下等種族人の爲に欺かれて之に情を通し密會
 することありて子を孕に當りて俄に驚き懼れ或ひは其子を
 殺し或ひは種族權を失ふことを愛ひて自害して死する者も
 往々ありとかまた或貧窮なる婆羅賀磨師の女が一の金満家
 のマホメット人のために欺ひかれ狼狽の事に陥されしゆる
 婆羅賀磨師親子三人が共に法廷に出てこの事の裁判を仰ぎ

たるも其願意達せざるを以て遂にその面目を失はんと
 恐れて裁判廷に於て親子三人共に自殺して死したりと
 大學者たるソンドルボーン Shindler Bosc 氏の印度記を讀むに近
 來は歐洲各國との交際開けしより時勢の變遷を知り斯の如
 き慘酷なる所業は追々に滅却し罰金の價も大いに下落を來
 したり今より數年前のことなるがカルクマ Cuttack 府に住める
 大金満家にして大に印度の開化を欲し頻に同國の進歩を計
 り飽迄も人民に改良を興へんと工夫たるラムゴフアル Ram
 Chopalase 公が大に辱しめを受んとせしことあり是はその母
 なる人は婆羅賀磨師に凝固りたる者なればその突進 Dumb
 神祭典のとき米穀蔬菜を多く獻供しこれを梵術地獄の
 別荘の近所に送り一をラムゴフアル公は婆羅賀磨師を誅た

りと云て盡くこの供物を斥けたるを以て其母は大に之を歎
 き斯ることを爲なば婆羅賀磨師の爲に其種族權を剝奪され
 んどて頻りに之を恐懼たるに公は狡猾にも一の計策をなし
 如何なる婆羅賀磨師といふとも自宅へ来る者には献物と金
 貳圓を與ふべしと廣告せしに梵術地近傍なる婆羅賀磨師は
 貧者多くして常に困窮するを以て宗教の我慢も怨の爲に制
 せられて遂にこの誘導に負いづれもこの金を得んとて争ふ
 て公の罪に來る者意外に多くあるにより公は終に大勝利
 を得て種族權を奪はるゝことなかりしといふ
 今代に至つては歐洲人との交際商業等も日に月に進歩せしめ
 る婆羅賀磨師も止を得ずその懸隔規則を寛かになし數多の
 印度人もマホメット Mahomet 人の施しを受け且その賣處の米

穀をも購求て食すること、なりたり而して之は論書の規
 則に據は甚だしき汚穢のことなりといへり然るに婆羅賀磨
 師が日々に食物とする砂糖演の白砂糖は即ち牛骨の灰を以
 て白く晒したる物なるに之を食しても穢れに至らざるは
 奇怪といふべし總ての城下に於ては印度人の書生のみなら
 ず金満家の主もこの隔ある規則を取除きて割烹店に到りて
 飲食一殊にカルクマ Culella 府に英國人の營める割烹店など
 は常に之等の人々充滿して大に繁昌するを以て印度人を指
 て料理屋第一の得意なりと稱する語をさへ生じたりき
 然りと雖もこの風俗習慣は今尙内國および多くの領地には
 嚴重に行はれて高位なる阿跋耶(領主)は其種族權を奪は
 れんと恐懼て若誤つてその規則を犯すときは多くの金銀

を呈し競進 Ganges 河に於て洗式をなし早速に自己の罪を除か
 んどに奔走するなり
 種族より出されし者たよび波里衣人よりも懐斥さる、藩あ
 りこれをペラクレ Parale 人と稱して元この人種はペラクレ領
 主より出づ者なりこはその初めにペラクレ王は財寶と應制
 とを以て大いに婆羅賀磨師の我段に逆ひ多くの婆羅賀磨師
 を殺害したる事あるにより其者の子孫は斯限りなく賤しめ
 られて継命はじめより婆羅賀磨師教義を堅く守りて可ひは金
 銀財寶を有し如何程出精勉勵するといふとも人間なりとは
 思はれざるなり茲にベンガル Bengale 府にサンデロイ Sanderis 公
 といふ高位の人ありきこれをカルクマ Culcutta 府の多伽羅 Tabor
 なるペラリ人の金満家が招待せんとせしとありその故は若

この公にしてペラクレ Parale 人の家居に来る事あらば夫が爲
 にペラクレ人は城下にある其他の人民と交際するとを許さ
 る、を以てなりとて此が爲に一千二十万圓の金を贈るべき
 とを云入たるも公は太く之を退けこの積れたる種族と交際
 するとを嫌忌なりき
 ペラクレ人は斯の如く種族人等に乘られしにより今日に至
 りては却て之が僥倖となり眞理を辨へし歐州人と常に隔な
 く交際を爲し大に國家の爲に力を盡し改良進歩に着手せる
 が故にダルクナス Darkhey Nakh 氏および英語なる開化新聞の編
 輯長 フロソノコール Prosono Conar 氏もこの國民に大いに力を
 協せ天竺人民をして歐州に倣ひたる風俗にせんとその進歩
 改良に盡力せり

之を約言すればペリ人は無種族人と稱せられすべの外
 國人即ちマホメント Nationat 人支那英佛獨の如く天竺種族權
 を有する許なく要羅賀磨師よりは人非人を見做れて次第に
 斯の如く種々の交際を拒みたるにて其の種族の隔てある規
 則は天竺の如く大害の絶なき元素となれり
 抑も斯の如く種族の分離して同類相合するの原由はこれ議
 論を好まず唯數ヶ條によりて印度人の弱き性質より來した
 るものといふべきなり
 逆りて昔時いまだ基督の勇氣の助力を知らざるときは舊エシ
 アト Egypt および猶太人ならびに西希臘羅馬の各國も聊こ
 の種族の習慣ありし尙今日に於てもアフガン Turan 國中亞細
 亞の土耳其人鞏固にはこの各種族を見當とあるなり然し

て印度人は此種族の習慣を充分嚴酷に一他迄も細密に定め
 過たる者にして這は畢竟印度人に還傳する性質が發猛なる
 によるなりこれ併ながら熱帶國の人種は勢力志望發心と
 もに衰弱なるを以て同類相結合して斯る權利を維持するの
 便宜を得るに至るなり斯の性質の懦弱なるため止を得ず
 細密なる種族を定るに至りしなり
 此種族は職工商買等が相互ひみ扶助する組合の組織の如き
 ものにして各自その先祖より遺傳せし活計方によりて線組
 をなし相互に補助する術を謀るなり然してこの種族の定
 めは熱氣のために懦弱になる人民の道德をおさめ謹慎を守
 しむるに便宜なり此種族には各自嚴重に行ふべき規律あり
 て若これを犯すときは種族より追放するの成規あり其罰す

る法律は時として必要ならざるも違警罪の如く其弱者のために罪を犯さしめざるに便宜あり譬は其罰にて同族人民と共に會食するを禁じ又或ひは寺院にいたりて宗教の儀式に與ることを許さざるなどのとあり其他或ひは土地の人民および親族を雖も其交際を禁ずる等の類なり
 世界万国にこの種族の習慣を波及せしめんとするは到底爲能はざる事なるのみならず實に大いなる害を讓すべし然れども氣候および過りたる宗教の教育をうけたる情弱の印度人のためには此習慣もまた止を得ずしてその性質に符合する者どもふべきなり故に讀者は能その異なりて同日に論ずべからざるを知るべきなり而して此習慣は一己人のために敷人して組織せし物には非ず無数の各藩同氣相結合して成

立たる者なるも不斗時代つゞきに之を鞏固にしたる者にて其同種族は原同血統より出しなり今に至りてこの習慣は腦裏に感染して改良するを嫌ふに至る實に氣の毒の次第といふべし
 兎も角も同種族の自由同胞兄弟の眞理を教種族の惡習慣を療治せんと欲するには基督教の原理を説聞せこれに服膺させるの他には又施すべき術なかるべし今その証を摘示せんに
 舊羅馬帝國希臘舊埃及波利斯 Persia ユールツ Gauls (今の佛國) 猶太
 と雖も社會および政治にかのづから貴賤奴僕を見當るなり而して絶て外國人に對して情愛を説を聞かざるなり這は日本にても舊藩といへる者は幾分かこの餘流あるが如く思はるゝなり

最も此種族の害は大いに憂ふべし然りと雖も一時に印度人を
 を他迄も譴責すべからず退いて吾人基督教國民等は深考察
 すべし仮令野蠻の印度人と雖も吾人の如く基督の恵により
 公教會の教育を千年間も受しめなば眞の恩恵と天の道理を
 能了知して忘れざるべし再び顧みよ國州の開明は抑も幾百
 年間も續たる基督教の傳導によりて今日の有様とは成たる
 予縱令亞米利加國の如きは諸君も御熟知の如しプロテスタ
 ン Protestant 教國の勢力をこれ見よがしに自慢するの國ならず
 や然に猶二十年前には數万の奴隸を使用せし事は歴史上に
 徴して明かに諸君も知る處なり是に由て之を觀れば今短兵
 急に印度人を譴責するは少しく過激の論といふべし然り
 理を以て論せんには主基督は萬民は兄弟の如く互に相愛す

べしと勸給へり併し社會に於ては貴賤貧富の區別なく平等
 の權なるべしと雖も他迄には勸給はず唯世人に天主の和睦
 を得せしめ人々に誠の道を知らしめ自身および他人の身上
 に就格別に造主に對しての務を傳へ給へり然れば各社會上
 には必らずこの道理を守るべし
 續て聖書を讀ば主の弟子たるローマの聖人の類に天主は
 誰をも區別し給はざることを述べたり然りと雖もコリント Corinthe
 前書第七章廿節には各人その召されし時に在分に止まるべ
 し又ユフエシ第六章五節には僕なる者よ基督に服ふ如く畏
 れ戦さ誠の心を以て肉身に屬する主人に服がふべしとあり
 況んやフヒレモン Philémon 書翰の如きは奴隸なる一人の信者
 の和睦をその主人に求めるために書認め給ひしものなりロー

聖人は博識家にして加之聖靈の感化を蒙りて基督教徒
 の同様の如きは飽迄も之を覺り給ふと雖も唯何處までも時
 代の習慣に逆ひこれと破滅せんとは爲給はず唯基督に御功
 力によりて其教會の教育に養はれし人民は自から眞理を悟
 り邪を去り正に歸り漸次に其情愛の満足する行ひを爲すに
 至しめ給ひしなり
 是皆基督の教示を受續し弟子達の教ふる處にして教會の教
 をよび其行ひなり故に公教會は止なく萬民に愛徳を賜しめ
 單に天主の尊前に萬民同様の義を説のみならず自ら之を行
 ひ常に人に示す處なり故に基督の代理となり教會を主宰せ
 しペートル Pater 宗徒の如きは卑賤の漁夫より擢れたる者な
 り又歐洲の歴史に光輝を發し給へるシキストキント St. Quintin

教皇の如きはその初め路傍に棄られし一子なり其至
 至位に坐り同等の權利を明かに守り給へり然りと雖も社會
 政治の權利自由は短兵急に之を制するなく各個人その開化
 を悟り次第に之を定めしむるなり嘗て基督は論者に對し
 て曰ひし如くセザル (Cesar) (羅馬帝の名) 此は國民政治社會を
 も共に指せしなり(に)屬する者はセザルに返すべし天主に關
 係ある者は天主に返すべしとある金言に従ひ公教會は昔時
 も今時も無理に社會人民の習慣をのみ改めず能く靈魂救助の
 道を教へ社會をして其教示の奥意を悟らしめ自ら其習慣を
 改たむるに任すなり
 今日も公教導會は外國へ傳導する規則を定め教を傳ふる
 時該國民に其習慣風俗品行等を一時に捨去しむる謀計を爲

す勿れ聊かも過渡の番發をなす勿れ其習慣風俗品行を改た
 ひべき事を信仰および道德に誘ふ如く勸る勿れ如何となれ
 ば支那の如きは佛國伊國および歐洲各國の風俗に遷るは大
 に嫌ふ處なり故に汝等は習慣風俗を傳導せしめて信仰の傳
 導を爲すべきのみ其信仰は何れの國々の習慣を輕くし棄
 しむる勿れ却てその惡からざる限りは之を保有せしめて可
 なるなり
 然して凡そ人の性質は各我本國を愛し其習慣を貴ぶ者なれ
 ば若昔時より馴染たる先祖の習慣を無理に變換せしめて他
 國の習慣を強て注入せしめんとすれば其國民は之を愛ひ遂
 に激怒するに至るべし而して又歐洲の風俗を其國民の風俗
 に比倣して彼等を誘ふ勿れ汝等は却てその至る處の國民の

風俗に馴るべし
 尙讀べきとは之を賞すべし能權衡を正し諂らふ者の如くに
 賞する勿れ尙これの評する勿れ或ひは強て或ひは妄に彼等
 を誡むる勿れ惡事は飽迄もこれを誡むべし雖も其誡むる
 にあたりては紛かにして衆人の前にて之を指摘發露し多語
 する勿れ顔色に顯はさず自然に此惡事を除き去しむる爲に
 眞の道を聽志望のある時を待べしと云々述べられたり
 之即ち三百年前に羅馬傳導會所の布告に細に記す處なり最
 も天の賢智を以て其教は明かに悟るべし加斯日本國に於て
 も愛國心に富る者は外國の教となして擴張爲ざるや然判な
 り
 天竺に於て天主教は如斯種族の習慣は短兵急に攻撃を爲さ

す其傳導をするなり若根に真理の培養をなさず一時に之が
 變更をなし撲滅を謀らば其國民は未だ其真理を聽す一
 時に激怒し之を輕蔑するに至るべし故に聖公會は各人に
 天主の道理を聽しめ其靈魂救助の道を傳へ真理を以て培養
 せしが今は其信徒數百万にかよびたり斯して是を全國民に
 普及する時は他國と同く之迄の癡習は漸次に削除して靈魂
 の同權自由より社會の同權自由の結果に至るべしこれ亦
 正の理にして基督教の功力によつてのみ此結果を現はすと
 を得べきなり

第五章

釋迦出世及佛教破裂

數多の作者が踵を繼ぐ讀誦 Rigveda を著し之を編み終り頃は
 天竺の哲學者流が頻に上嶽々魂未來等の事を搜索し未だ摩
 拏律法の出來ざる以前なり時に尼波羅 Nipata と云ふ山の麓に
 在る迦比羅那伽羅 Kapila Nagara と云ふ地に一の英傑が顯れ名を
 薩婆曷刺他悉陀 Siddharta と云ひ或は釋迦牟尼と云ふ此人萬國
 の俗語に佛陀 Buddha と呼れ佛陀は賢知てふ意味にて漸々勢力
 を増し遂に數百年間天竺固有の宗教として盛大なりし婆羅
 門教を應倒せり
 婆羅門師は釋迦の勢力を見て大に驚き乍ら狡猾に評て云ふ
 彼はウイスヌ Vishnu と云ふ神の第九番の出世ならん併ながら
 偽物か知べからず如何となれば彼は刹恒利耶 Kshatriya の種族

に喬答摩 G. Rama と云ふ親の釋迦 S. J. S. の血統迦比羅伐摩塔國王
 N. Divaslu 首圖駄那 Suddhodana の子なり母は摩耶天女 Mayadevi と稱
 し彼が誕生の後ば女の神と成り而て死たる者なり云々
 神童遊戯經 Lalitavistara と云ふ佛教の修多羅 S. J. S. に百端の奇説
 を爲て云ふ此子漸次に成長し幼毘耶 S. J. S. と云ふ婦を妻に娶り
 しかど常に沈思黙想して樂まを頻に世の虚き事を考へ人の
 病を見て己の病を感じ人の老を見て己の老を感じ人の死を
 見て己の死を感じ鬱悶遺方なかりしが遂に乞食修行の比丘
 行者を見て忽ち悟り塵の世の榮を捨て清き月を見と思ひ定
 め自ら位に離れ妻子親族を頓す馬に驅ち山の奥に至り從ひ
 來る一人の馭者に別を告げ己が衣服を脱て馬の脊に乘せ馭
 者に比馬を曳て返らしめたり

紀元後六百三十年日本天皇三十五代舒明天皇の御宇に當り
 支那の玄奘三藏が天竺へ渡り其時の日記に拘尸那揭藍 N. J. S.
 Nagara の路傍に於て紀念碑の建し寺を見る云々と在り是れ則
 ち今のゴラフル Gorakpur 府の南方十八里の地にして其寺は
 悉く破壊せり此段に就て聊か述べき事あり釋迦の履歴を見
 て無宗教者が基督教徒を嘲り基督教徒が尊ぶ所のシヨサへ
 A. Josaphat と云ふ聖人の履歴は全く釋迦の履歴を寫したる者
 なりと云ふ然ど此等の事は聊か基督教を調し者の目に見る
 時は誠に笑ふ可き事にて探るに足らずダマスセンのシヨア
 N. Jean Damascene と云ふ聖人の著書を一讀して明瞭なる証據を
 得に至る假令何程相似る箇條あるにもせよ神童遊戯經と云
 ふ書的年代は降生後六百年にしてダマスセンのシヨアンと

云ふ聖人の著書の降生後四百年なり
 釋迦は初め吠舍釐 Vessali の城下に趣き或る婆羅門師に従ひし
 かど忽ち離れ摩揭陀 Magadha 國毘羅閣信利咽 Rajagriha 府に趣き
 他の婆羅門師に従ひしが又た忽ち離れ五人の連を誘ひ迦邪
 (Sinhala) 府の傍に在る一の苦行林 Uruvela と云ふ邑に至り樹下に七
 年の座禪を爲し五人の連に別れ其後婆羅門師が他の種族を
 壓制し外面に善を飾り身を立んと欲する容を見て大に憤り
 斷然婆羅門師に離れ頸に婆羅門教の説を駁し我は座禪の力
 に依て万物の理を悟り上靈に就て自ら賢智なるを知れば
 佛と成て一切人間の迷を拂ひ専ら罪を防ぐ勤に興る可と自
 稱するに至れり
 斯て天竺宗教學問の最も盛なり一波剌那斯 Pataliputra 府に趣き始

て五人の弟子を撰みしが齡三十六歳なりし日を経て五人の
 弟子に佛教根本の奧義を傳へ大に新説を擴張す之が新説の
 大略を神童遊戲經と云ふ書に載て曰く人世皆苦難なり好や
 壽命延長して如何なる富貴快樂を極る者と雖も永遠不朽の
 眞誠大義に比る時は災害の街に等し依て宜く道を行ひ法に
 従ふ可し是れ眞誠の幸福なり殊に人間の一生は四苦と稱す
 る者なり則ち生産の苦み老衰の苦み疾病の苦み死別の苦み
 此四箇條は如何なる人をも逃れ難し實に今の世界は泡沫の
 如き世界なれば疾く之を厭ふ可し云々
 釋迦の修行せし所は波剌那斯府の傍に在る畢鉢羅 Pipitika と云
 ふ樹の下なり植物學者の訓に依はヒバラは無花菓樹なり釋
 迦が此樹の下に於て修行せし故に佛教の徒も大に此樹を尊

べりベナレス府に今尙存在せる古跡あり阿育Asoka王の建し
 紀念碑の壞たる者にて是は降生前二百五十年に建たる者な
 り周圍に無花菓樹を植ゑ其傍に石山あり山中此所彼所に洞
 窟を見る是れ則ち釋迦の弟子が住たる所なり佛教破滅の後
 は奈詣の道場も變り果て今はウイスヌVisnuと云ふ婆羅門教
 の神の宮と成り佛教の影をも存せず
 波刺那斯府に於て釋迦の門に入り第一高名の弟子は世人の
 能く知るヂボダカDhodasaと云ふ王にて此王の事を詳しく記
 せし書は婆羅門教の譯語RigVedaなり塞建陀富蘭那Skandapurana
 と云ふ書にも婆羅門師が狡猾の方便を以て頻に此王を誣は
 したる事を載たり波伽婆富蘭那Bhagavata Purana 書及び摩醯涇伐
 羅富蘭那Vishnu Purana 書及びウイスヌ富蘭那Vishnu Purana 書などは

之に反對の論旨なれども佛教の起原を述べ此王の事を細に
 証さ波刺那斯と云ふ府を建設せし時代をも判然書載たり斯
 る數種れ証據に依りリツクウエに在る諸人の詩歌が皆な
 釋迦の時代の作なる事を知に足る
 釋迦は摩揭陀國頻毘娑羅Bimbisara 王の刺に依り波刺那斯府を
 出で曷羅閣信利耶Rajagriha 府に趣き長く迦蘭陀Kalandakaと云ふ
 寺に止る此寺は或る金持の商人が釋迦の爲に建し一大城下
 の傍りに在り頻毘娑羅王の事はウイスヌ富蘭那に詳しく載た
 り此王はセシヤナガSushanaga 王の血統にて四代目の相續者な
 り此王の血統は降生後四百年まで續けり併し此王は婆羅門
 師の徒黨に依り阿闍多設咄路Adjitasatruと云ふ我子の爲に殺さ
 れしが此時釋迦は雪Himalaya 山の麓に在る室羅筏悉底Srivasthiと

云ふ地に逃れ或る金持の商人が建し寺に長く止りしと云ふ
 斯て釋迦は十二年の後迦比羅伐摩塔Rohitassa府に趣く然に此
 時國王は一大行列を以て之を迎へ慎で法を問のみならず后
 妃を始め伯母姪等を比丘尼と爲したれば數多の婦人が之を
 倣ひ剃髮して隨喜せり然ば遠近の老若男女相競て門に入る
 此時の事を摩拏律法に依て見れば摩拏律法は此比丘尼を逆宗
 の行者と名け而目なき婦人の如く云り
 刹帝利耶 Kshatriya の種族も他の蕃人も陸續釋迦の勸に順ひ悉
 く其門に入る彼等が釋迦の勸に順ひ其門に入し以所は全く
 釋迦が万民同等の説を唱へ婆羅門教の習慣に貴賤隔絶の惡
 弊あるを論破したるに在り殊に彼等の愉快を感じたるは釋
 迦が彼等に向ひ人間は都て同姓なり故に上下の區別なく修

行さへ成就せば三界の尊者と成り万民の道師と成り最上の
 賢智と成る未來の助り靈魂の安樂は婆羅門師の徳に依て得
 る者に非ず人間の自業自得なりと論じたる時なり是より彼
 等は婆羅門師を憎み熱心に釋迦を尊崇し釋迦の謙遜と謹慎
 と仁慈に感服せり然と摩拏律法は大に彼等が婆羅門師に背
 事をも咎め彼等は婆羅門師の説を聞き婆羅門教の儀式を捨
 し故に一段等級を下すべしと論じたり
 釋迦八十四歳の時曷羅闍結利咽Rohitassa府に歸り無道の惡王
 を以て改心せしむ則ち親を殺せし阿闍多設咄路と云ふ王が
 大に己の罪を悟り釋迦の弟子と成る或時釋迦大勢の弟子を
 連れて恒河 Ganges 河に至り河の傍に在る方形の石上に止り市中
 を願て曰く我れ終に臨み此町を見る云々と此石今尙存在す

是は釋迦が死期の近を告たる者なり新約全書路加傳十九章四十一節に基督が死去の前にゼルザレム Jerusalem の城を顧み弟子に向て悲み給ふ事實に相似り
 其後釋迦弟子に向ひ汝等熱心に情慾を制し妄想を去り行法を修し誠律を守り宜しく聖人と成る可し聖人と成て現在未來の幸福を受よ云々と述べ而て毘舍離 Vesali 府今のベッサル Poshar 府に趣き拘尸那揭羅 Kusinagara 城今の迦奢 Cusin 府に至り將に死せんとする時弟子は勿論諸國の王侯大臣が一時に集り來る此時釋迦弟子に向ひ汝等佛法を疑ふ勿れ我今涅槃ニ入る前に當り汝等に取律を遺す夫は万物を悟し者の元來即我は塵芥に歸す然と汝等は哀む勿れ我れ取律行法道徳の三寶を汝等に遺し世の終まで傳へんと述をはり靜に呼吸を

斷たり
 既に釋迦此世を去り數多の弟子が行列を以て葬儀を爲し屍は焼て白骨を拾ひ之を分配したるが觸骸を各國の王侯が別て寶の如く大切に保存し中には埋たる向も在て其上に廣大なる石碑あり名を窣堵坡 Stupa と稱し今尙古跡を存す則ち阿育王の時錫蘭 Ceylon 島カンヂ Kandy 城に建設せし紀念碑も其一にて今を距る三百六十七年前葡萄牙人が之を奪ひ是は迷の種なりとて破壊したるに土地の人民が頻に工夫を回し一の良策を案じ出し釋迦の骸は一且此所に埋めしかと密に盗みたる者ありて今は偽物なりと云ふらし葡萄牙人を欺き漸く保存したれば今に佛教の寶と成り參詣の人は絶間なし
 神童遊戯經 Lalihavistara 書に在る釋迦の履歴は概ね斯の如し然

と釋迦出生の年代と死去の年代を詳に爲す之を詳し爲る事は誠に大切なる業なり如何となれば之を詳に爲ざれば佛法の起り年代を知る事あたはず且つ之を詳に爲る時は天竺の歴史を調る第一の便宜なればなり

天竺に於て佛教を守る各種の蕃民が口碑に傳る所は一も符合する者なし大乘マハヤナ *Mahayana* 部の首長出生の年代は紀元前一千三十年に當り死去は九百年なりと云ひ支那日本の人も此大乘教の説を守る又た小乗ヒナヤナ *Hinayana* 部の首長釋迦出生の年代は紀元前五百四十三年なりと云ふ是れ錫蘭島の人を初め都て佛教を守る人の信する説なり

併し數多の學士が天竺の古跡を綿密に調べ婆羅門教の聖書に在る所要大切の箇條を引て在希臘國の歴史に照し之が年代を研究せし事あり其中有名の學士が理論を以て決斷せし確なる説のみ揚て左に記す

ウイムソン Wilson 博士 ウィスヌ 富蘭那 Vishnu Prana 書を翻譯し常に此事を絶えず論究せり博士の精神を籠し細密の調査に釋迦の出生は紀元前三百八十九年と在り又た天竺の古跡を調し學者の中に最も有名の學士マックスムレール Max Müller 氏の調査に釋迦の死去は紀元前四百四十七年と在り此等の説は確乎たる説にて地中より掘出せし阿育王の紀念碑の文に符合す蓋し阿育王の紀念碑の文に阿育王が紀念碑を建し年代は阿育王が即位の三十七年と在り然ば紀元前二百六十二年なり而して文中釋迦の滅度を認し今を距る二百五十六年と在り二百六十三年に三十七年を除ば残り廿六年と成る之

に二百五十六年を加へ合計四百八十二年と成る故に釋迦の死去は四百八十二年と知る可し其他各地に紀念碑ありて多少年代の相違われと大体此説に十年五年の差ある耳なり斯の如く細密の調査に依り確乎たる理論より引出せし証據を以て釋迦の年代は凡そ紀元前五百年と假定す尤も百年内外の相違あれど苦慮するに足す釋迦の年代は左程に古からすと云ふ事を知れば可なり

釋迦は一卷も經書を遺せし事なし釋迦の死後に至り弟子が師匠の教を傳ふる爲め經書を一定せんと欲すれど互に異説を主張し一定する能はず數多の論派を生じたれば蘇跋陀羅 Suddha 云ふ弟子が師匠の權威を續ぎ壓制を以て之を防がんと欲すれど他の弟子が従はざれば詮方なくして摩訶迦葉波

Misapp 云仙人の勸に依り弟子一同が曷羅閣結利咽 Misagim の洞の中に七箇月間會議し遂に教義を一定し之を書に認め戒律を撰み決す斯く三藏の經律論書を認めしは則ち最初の原書にして佛法の大畧なりと云ふ然と此原書を稱する者も後代に出來たる証據あり

或る研究學者の説に依り釋迦は伏陀書に在る婆羅門教の神を撰滅する心なかりし如何となれば婆羅門教の神は多年人民の腦髓に浸入し習慣と成たる者なれば却て釋迦は之を敬ひ因陀羅神阿耨尼神を始め其他諸神の功力を遠たる事あり玄奘三藏渡天日記に釋迦は諸神と共に天より降れる神にて婆羅吸摩 Balma 神因陀羅神も共に降れる者なりとの説なりと認めたり此事を調べ見に釋迦も一の上級にて自ら生

活する神を信じ名を阿提佛陀 Adhitha と稱し自分は其神の第十番目の出世なりと述べたる事あり
 釋迦の經論は自然なる上靈あり上靈は休む如く眠る如く清静不動にて形像なし故に万物は之に固着せずと雖も上靈は無量無限にて自ら万物の中に充滿す依て世界を造る爲め上靈は休眠清静の中を出て五圍の天然大佛を造る是れ則ち地水火風空の五元素なり此五元素より万物の形像出現せし者にて素より釋迦は造物主たる大全能ありと云に止り決して輪回の説など述べたる事なりと論むる派も在り
 或る研究學者の説に依れば佛敎は宗教に非ず如何となれば佛敎信徒は信徒の名ある耳にて實は無宗教者なればなり故に佛敎は天地万物の造主たる上靈ある事を説き雖も造主を知

す奥義を探索すれば上靈の全能は品行の如何に依り人を賞罰する耳にて原語に 裁磨 Karma と云ひ譯すれば因果と成る即ち職工の勤怠に依り給金に多少ある如く人の行ひ善惡に依り苦樂の賞罰ありと云ふ是れ輪回の説の由て起る以所なり而て人の善惡を賞罰するは上靈のみに非ず一の裁磨即ち因果の道理なる者より出て恰も菓物が根幹より結ばれたる如しと云ふ夫れ斯の如く上靈は有とも無とも分らず中途にぶら／＼して捕ふる所なし
 婆羅門師の伏陀多 Vedanta 哲學者の如く佛敎も亦た人間は上靈の部分にして形体の元素に合したる者なり之を分て云ば肉體は玉の元素にて組立られ靈魂は自ら生活する上靈の部分なりと主張する者なり

佛説の結局は世界自然の有様が漸次哀痛悲歎の有様と成ると云に在り故に釋迦は此事を頻りに述べて弟子に傳へ眞正の幸福は得に難と論せし者なり婆羅門師の説く輪回(リウカイ)は前の世界に於て犯せし罪に依り靈魂(レイメイ)が他の肉体に移る者なれども釋迦の説し輪回は活る望み(ノゾミ)在る故に輪回する者にて若し靈魂が活る望みを失ふ時は輪回する事なし活る望みの續く間は止を得ず地獄餓鬼畜生修羅人間天上の六道と四州四惡趣六欲梵天四禰四無色無想五那舍の都合廿五石界へ輪回する者なり此等の場所は迷理沈苦の多き場所なり

何の研究學者の説に依り極樂は斯る輪回の規則に外れ特に靈魂が圓滿の者と成り原語に之をニルウアナ(Nirvana)と云ひ涅槃と譯す而て極樂往生は全く活る望を斷て輪回を消滅し百

端の慧願を立て修行を爲し初て茲に至る者なりといふ此ニルウアナ即ち涅槃は如何なる者乎と云に原書の字義は裸體と云ふ意味なり佛説に人の肉身は靈魂の衣服の如し依て後世の快樂は肉身に無く靈魂に在り故に靈魂が肉身の衣服を脱ぐ之をニルウアナと云ふ即ち涅槃なり

斯の如く涅槃は輪回の打消に當る殊に笑ふ可(べ)き或る佛敎の行者が人に涅槃の意を示す爲め丸の裸體に成て暮し終に皮膚黒色と變じたれと耻る氣色も無く我は舍羅摩拏(Sramana)即ち行者なりと説しかば人は大に彼の不潔を厭ひ娑摩若(Samama)即ち耻しらすと呼び擯斥したる事ありしといふ故に舊希臘及羅馬の歴史家は皆サーナ宗と名け彼徒の不潔を罵り紀元後三百年の頃は基督教會最初の學者エロニモ(Jerome)聖人オリヂ

エン Origen 博士などが彼徒を呼ぶサマキル Samano と云ひビ
 ル Birmah 暹羅 Siam の兩國に於ては釋迦を婆摩若喬答摩 Samma Sammasa
 と呼びダツタンの僧を沙門 Chaman と云ひ蒙古滿州に於ては佛敎
 と異敎の混じたる者とシヤマニ Chamanism 宗と名け何も大に擯
 斥したり
 靈魂が肉身を離て後の有様に就て佛敎の諸説を調べ見に一
 も確なる者なし婆羅門敎に傳る涅槃 Nirvana の説を探り哲學の
 論旨を以て人の靈魂は肉身を離れ終に上達の圓滿に復歸す
 る者なり杯と云ふ是は瑜伽 Yogi 論派の哲學の極理にして則
 ち望を滅する事なり故に此説は靈魂が休む如く眠る如く成
 て形体の万物に執着せざるなり釋迦の弟子に我は死を欲す
 る事なく生を欲する事なし唯だ庸夫の給金を得て喜ぶ如く

給金を得る時節を待と進たる者あり給金の一言は甚だ解し
 難し佛敎の論義は都て斯の如く理を究て解し難き事の多く
 在て妄信するの外に術なし
 數多の學者が頻に涅槃の解釋を研究し終に之は生命の消滅
 する意味なる事を知る故に佛敎の徒は涅槃を五管の快樂に
 非ず分別意識の幸福に非ず知恵の徳に非ず又た有形に非ず
 無形に非ず良心を悟るにも非ざれば悟らざるにも非ざるな
 りといふ然ば活る者に非ず死る者に非ず其理の極點に至ば
 唯だ一の空なる者のみ夫さへ佛敎には判然たる説を立す豈
 に奇怪千萬ならずや
 概て云ば佛敎は造物主宰の事も未來永遠の事も確乎不疑の
 論義を持たず前に述し如く或る研究學者が佛敎は宗敎に非ず

と云一も宜なり然と佛敎の徒が何か拜む所を見は無宗敎者
 には非ざるべし天竺サスニ毒人の格別に拜む神は蛇にて
 其他の蕃人も黒鬼の像を拜する者あり亞細亞の東部に至ば
 先祖や親を頻に拜み或は釋迦を神の如く拜する者あり佛敎
 の徒と雖も天賦の良心に神の在る事を知り神を拜む思は在
 と誤て眞の神を知らず偽の神を自ら造り出し之を拜する者に
 て迷お陷し有神論者なるべし
 佛敎の戒律に聊か理の在る所の者は殺す勿れ偷む勿れ邪淫
 を犯す勿れ虚言を吐く勿れ酒を飲む勿れ等の五戒と善を以
 て惡に勝ち慈悲を以て嗔意に勝ち眞を以て虚に勝ち嫉妬の
 念を斷べしなどある箇條なれども此等の誡律は天主が人
 祖に命じ給へる者にて人間の良心に銘刻せられし者なれば

誰しも之を知ざる者なり馬太傳福音書五章四十四節以下を
 見よ我れ眞に實に汝等に告ん汝等其敵を愛し汝等を誣ふ者
 の爲に祝し汝等を憎む者を善祝し汝等に迫害を加ふる者の爲
 に祈れ是れ則ち天に在す汝等の父の子と成らん爲なり天に
 在す汝等の父は其日を善人にも惡人にも照し其雨を義者に
 も不義者にも降し給ふ云々と在り之を佛敎の戒律に於て如
 何佛敎の徒に少く願ふ所あれ天より出たる敎は斯の如し
 佛敎の所説は婆羅門敎四派の中に最も勢力ありし哲學の一
 派瑜伽論より出たる者なり故に瑜伽論に於て事の判然せざ
 る所あれば佛敎の所説に於て之を知る可し如何となれば曾
 て婆羅門師が宗敎を機械に用ひ壓制の企望を充分に遂んと
 欲して百端策略を廻し爲に教育勸導も徳義を失ひ究理悟道

も幹を離れ枝葉のみと成たるを釋迦が反對に出で大に駁撃し比丘比丘尼優婆塞優婆夷は勿論一切人間の種族の異同に拘はらず一の紐立てにて同等なりと主張したれば漸次に勢力を得て婆羅門教を壓倒したる者なればなり

婆羅門師は祭司の職を以て己が種族の特別の務と爲し終に定規を破り宗則を亂し懶惰放逸に流れ兎角其位を濫用したるに釋迦は祭司の職と僧侶の務は男女老少を撰ず法は貧富同權貴賤平等なれば善惡邪正ともに上智を得て最上の尊者と成る故に浮世の盛衰を棄て修業を爲す者は畜に來世の救靈のみならず今生の安心を得べいと説たり

釋迦の妻伯母等は疾に變を劇り比丘尼と成たるが彼等の誘引に依り續て比丘尼と成し者も多く在ると大體は夫に離し者

か不義の夫に捨られたる者か身軀の不具なる者か婆羅門師に格別の壓制を受し者か都て浮世を厭ふ原因ある者のみなりしと云ふ是は左も在べき事なり

釋迦の死後は佛敎が二派に分れ僧侶は二黨と成り一の黨を舍羅摩拏 Samana と稱し座禪の行者にて汚穢ある塵俗を脱脚し清き深山幽谷の中に住み其他にも乞食を爲す處の比丘 Bhikkhu と云ふ黨がある彼等が會議に於て位階を進められ其上修行の道具鉢袋杖等を授けられたり此黨の僧侶は黄色の袈裟を掛け杖を曳き鉢を捧て乞食の修行を爲し都て妻を持たず

婆羅門婦利四 Rajasika の會議を佛敎最初の會議と云ふ其後百年内外に再び會議を開き取律の基礎を固め不義の僧侶を放逐す最早此頃夥多の僧侶が不義の習慣に溺れ嚴重なる精進

とも破毀する程にて貧窮の修行なんどを守る者は甚だ稀なりしと云ふ成程摩訶伐那蘇 *Mahavansa* 偈を見に毘舍離 *Vesali* 府の會議に於て有名の僧侶七百余人が八日間評議し不義の僧侶一万余人を放逐し放逐されたる不義の僧侶が黨を組で異説を唱へ夥多の論派を生ず是れ佛法分烈の初にて夫より漸々數派に分れ各自異説を主張し相競て門徒を募り熱心に傳道したれば遂に十八派と成りインドスマン *Hinduan* 領ヘンガル *Bengale* 府よりアフガニスマン *Afghanistan* を佛法の聲を聞さる所なき程なりしとあり

天竺に一大關係の在る舊希臘國の正き歴史に就て佛影の成行を訓べ見に第二番の會議後六十年に當り即ち紀元前三百二十七年日本天皇六代孝安天皇の御宇に歴山大王が亞細亞

西部の諸國と戰ひ勝利を得て舊波刺斯 *Persia* 國を討ち進で天竺の西部アフガニスマン國王を虜と爲し國中各所に城を築き今のカリカル *Charkhar* 府カブル *Cabul* 城を初め都て天竺の西部北部を取り信度 *Indus* 河を渡りヒ河七信度 *Sapthindhu* 領地を越て今のペンヂヤブ *Pandjab* 國に入り夥多の小蕃土人を威服しホルス *Porus* 王の城下たるシャデー *ShalDheri* 城及びムルナン *Mulan* 領跋路迦 *Baluch* 領を初め其他の各所に奉行を置き軍勢を遣て身は本國に歸る其後歴山大王は世を去り國は四に分れ天竺はシリヤ *Syria* の中に加られたり是れ有名なるセロリス *Selencus* てふ國王の血統が出たる初なり其頃歴山大王の旗下に塵迦陀 *Magadha* 國王の血統にて護月 *Chandragupta* てふ豪傑あり大に戰爭を好み希臘の奉行と一小國王の間に策畧を以て戰爭を起さ

しめ其處に乗じ大軍を帥てマガマ國を攻め波吒梨那 Pataliputra 城を取り恒河 Ganges 河を渡り各所に在る希臘の軍勢を己の軍勢と爲し之を悉く刹帝利耶 Sakya の種族に編入したり是と同時にシリヤ國セロス王が兵を率て天竺に入り護月と戦ひ遂に敗て和を請ひ雪 Himalaya 山より信度河まで天竺の領地を渡し固く條約を結んで公使の如くメガステン Megasthenes 氏を送りしは紀元前三百六十年なり一が紀元前二百年に至り再び希臘の軍勢が天竺へ侵入したり

護月王は佛教を信じ其子頻婆娑羅 Bindusara 王の時代に至り天竺北部西部は勿論東部海岸マトラス Matala 府の近傍まで佛教を傳播せり然と佛教の第一勢力を得し時代は第三代目阿恕迦 Asoka 王の時代にて紀元前二百五十年なり此王は佛教の徒が

阿育王と稱する王にて護月王の孫なり此王も非常の豪傑にて大軍を帥ひ四箇年間戦争を爲し遂に勝を得て迦濕彌羅 Caubhin 領島羅閣補羅 Rajputra 國などを奪ひ天竺北部一圓と西部の海岸よりベンガル Bengal の海岸まで鎮定せり其後宗教の研究に着手す其頃は未だ婆羅門教の餘臭あり一がば初に婆羅門教を研究し次に佛教を調べ佛教の説に感服し佛教の信者と成り佛教を國教と定め一の事務所を設け之を達磨摩訶摩那 Dharmamahatira と名け外國傳道の僧侶を出せり此事務所より出る外國傳道の僧侶は威な乞食の姿にて麻の法衣を纏ひ手に一の鉢を携へたり

斯て釋迦の紀念碑の如く珍き窣堵波 Stupa 即ち石碑を建築せしのみならず摩迦陀國に廣大なる毘伽羅 Vimra 即ち寺院を建

築し之が爲め國の名を今に毘伽羅と云ふ或る學者の説に依
 ば現存せる古跡四十有餘あり其中有名なる者は伽耶府デリ
 D.三府波吒梨那 D.三府などにある寺院にて威な深山幽谷
 の巖石を穿ち建築せる堂宇なり建築の年代は紀元前二百五
 十年より全く二百十五年まで三十五年の間にて阿育王の諡
 名ピヤダシ Pradasi 王の名義を以て碑文に書載たり司教ラウエ
 ナン Louchen 師の天竺 イツボーゼ I. S. P. G. 師ら石洞窟の中に築
 し舊寺の調査と云ふ書を執筆し大畧を述べ左の如し
 天竺漫遊の旅人が見て驚く者は第一に寺院の古跡なるべし
 中に就てイツボーゼと名する石洞窟の中に築し昔時の寺院
 は廣大なる寺院にて建築の年代を知れる者なし土地の人民
 は無始以來の寺院と稱し無宗教徒は之を屈竟の証據と爲て

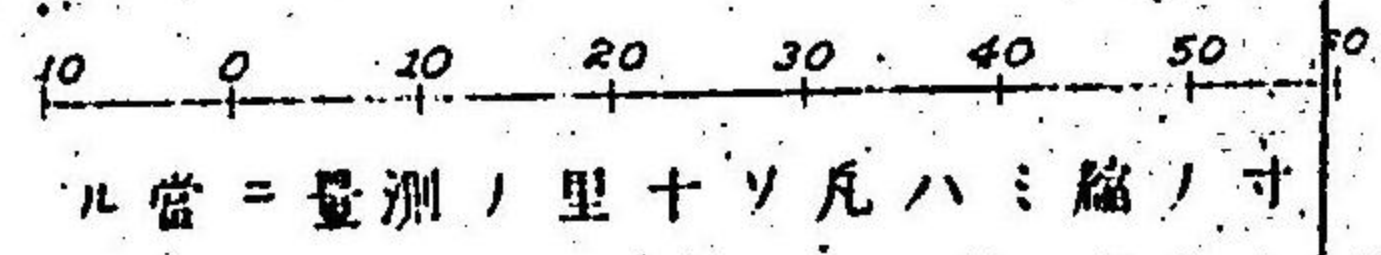
猶太教基督教を駁撃し猶太教基督教は要羅門教の模倣なり
 と云然と余は此地に長く止り建築の方法と彫物の模倣を調
 べ他の古跡に對照し各國の歴史に就て百端の証據を求め確
 に建築の年代を知り無宗教徒の論鋒を挫く充分の利劍を得
 たれば茲に之を開陳す
 廣石洞窟の中に築し寺院の古跡は中天竺南部に多し故に尾
 底耶 Vindhya 山那羅婆多 Narabadda 河の南インドスマン Hindustan 領
 ンガル Bungle 府などに於て見る事を得ず達觀擊 Ocean 府ボン
 ベイ Bombay 府の山奥に於て多く見る且つ此邊の巖石は柔なる
 故にや百端の彫物も見事に出来て殊に珍し又北天竺ボンヂ
 セリ Ponthehery 府マドラス Madras 府ギンヂ Gingi 府の南部北部の山
 に在る洞窟の中に寺院れ最と廣大なる古跡あり此等の建築

ば皆な婆羅門教と佛教が競争を初し頃になれたる者にて年代
 を知に確なる証あり
 此等の寺院は五種に分れ其一を毘伽羅 Vihara と云ふ是は婆羅
 門教の毘羅那波羅修多 Viharapala と云ふ僧人を祭る爲に建築せ
 る寺院にて即ち婆羅門教の寺院なり其二を脂帝浮圖 Chhatra
 と云ふ是は最も高き塔を築き塔の上に輪を置き輪の中に舎
 利 Shali の香臺を設く即ち佛教の寺院なり其三は摩醯涇伐羅
 Siva と云ふ神を祭り或はリンガ Linga と名る男女の生殖機を祭
 れる者にて婆羅門教の寺院なり其四は巖石の外部に凡物を
 爲し内部を堂に造れる者にて婆羅門教の寺院なり其の五は
 裸体の一大偶像を祭れる者にて佛教の類廢せし彼シャイニ
 Dhinisme 宗の寺院なり斯の如く五種に大別すれども偶には佛

圖 中 天

中 天 之 笈 圖

釋 迦 之 古 跡 地



教と婆羅門教を混合せる者あり想に最初は佛教か婆羅門教の寺院なりしが後に戦争の爲め敵の手に落て混合せし者ならん

第一 エレファンタ Elephants の 舊寺

エレファンタはボンベビル府の海濱中に在る一小島にて市街を距る凡そ二里なり天竺人は之をエラフリ Carpent 島と名く此島の南の岬に在る岩石に象の像を彫み在る故に葡荷牙人が此島をエレファンタと名たる者にてエレファンタとは象と云ふ意義なり此島三百年前より浪に破碎せられて漸次三角の形と成り終に裂て今は大小兩箇の山と成り其間に一大溪谷を生じたれと尙其周圍は二里餘あり此島の洞中に舊寺あり有名なる古跡にて本堂の高き山の半

腹に達し大石を以て階段を築き入口は恰も山門の如く美麗なる裝飾あり石を重て椽と爲し二本の石柱を以て之を支へ本堂の兩脇に二箇の小堂を設け都合三棟あれども漸次に山が壞れ今は大に損所を生じたり

本堂は高さ二丈に表口十三丈奥行十三丈と見ゆ堂内に五箇の室を設け石柱二十六本を以て石の天井を保ち正面に安置せる偶像より寶柱壁椽に至まで麗しき石にて柱と壁は浮刻の偶像を以て飾と爲し感ずべき工なれど尙分數百星霜を経て各所に破損を生じ刻物も磨滅して分明ならず

本尊は中央に世界万物の造化主婆羅吸摩 Brahma 神を祭り右の方に世界万物の守護者ウイスヌ Vishnu 神を置き左の方に世界万物の滅亡者摩醯浮羅伽羅 Mairajira 神を置く

本尊の右の方に廊下あり此所にはトリムリナ Trimurti 三位一體の像を祭り左の方にも廊下あり此所には半身男子半身女子の像を壁に刻み之を右男左女の像と稱し又たウイラヂ Viraji の神と云ふ而て男の方を毘摩羅 Parvati の神と云ひ女の方を摩醯浮羅伽羅の神と云ふ此ウイラヂ神の右の方に一の蓮臺を設け四方に向ふ四面の像を安置す是は世界の四方を見る婆羅吸摩神を祭れる者にて其傍に羯路茶 Garuda と云ふ尊き鷲に乘しウ非スヌ神の像も在り象に乘し因陀羅 Indra 神の像も在り手に一の環を携し女子の像も在り

トリムリナの像摩醯浮羅伽羅神の像毘摩羅 Parvati の像を遙に離て同じ壁に男女二人の像を刻み在り此像は身体より頭上まで一箇の蛇が纏ひ其蛇の口中に密柑石榴の如き菓物を含む是は

人祖アダム、エバ、樂園に住む有様を寫せし者にて、婆羅門教の説に上性兩判と稱し、半身男性、半身女性の神がウヰラヤを生じ、而て摩拏 Mimi を出す。摩拏は智慧の人なりとあるは、全く舊約の創世記第一章に、天主天地万物を造り、人を造り給ふ。初の人、は男女兩性云々と在を寫せし者なり。其他兩側の壁に、數多の像を刻み、在と或は磨滅し、或は破損し、細密に調査を遂る能はず。柱も上部は天井に附て、下部は己に壞たる者あり。此等の建築は、容易の事に非ず。普請中數百年數千年の日子を費し、巨大の金錢と、巨大の勞を費したるに相違あらずと云ふ者あれど、婆羅門教に於て、婆羅吸摩神、摩醯馱斯神、ウイスヌ神の三を以て、トリムリチと云ふ三位一體の像を組立し事は、富羅那書以來の事にて、以前にはトリムリチな

し、而て富羅那書は紀元後七百年に筆を起し、全千三百年に終たる者にて、摩醯馱斯神、摩羅神、毘摩神より産たる男女兩性のウヰラヤと云ふ神の説も、同じ時代に起たる者にて、判然たる証拠あり。然ば之を本尊と爲し、此寺の古からざる事を推て知る可し。且つ此邊の巖石を調べ、見に至りて性質の弱き巖石なれば、斯る細工を長く保ち得る者に非ず。現に英國政府が之を保存せんと欲し、百般尽力するも、未だ其方法を得ざるに非ず。や此等の点より考へ、見に此寺の建築は、紀元後九百年内外なるべし。

第二 エロラ Ellora の舊寺

ナレンガハト Aurangabad 府の近傍に在る小山の洞中に、一の舊寺あり。之をエロラの洞堂と云ふ。土民の口傳に、依ば今を距る七千年前に、此堂を建築したりと云ふ。併し歴史を調べ、見にエロ

ヲと云ふ街の出来一年代は紀元後九百年に在り而て紀元後千二百九十年に至り初て此堂の事を歴史に書載せり此堂は石造にて八丁四方あり入口は山門の如く山の兩端に在り堂内數十の室を設け皆な廻廊を以て連続し中央の大堂をカイタサ Kintsu と云ふ是はソノの神の極樂てふ意味なり長さ二十五丈に幅十五丈にて高さ十丈あり其他の堂も長さ十丈に幅六七丈より少なる者なし此堂は婆羅門教か佛教か又シヤ井ニス Djinism 教か判然しがたし如何となれば堂内の偶像が三教の偶像を混合したればなり然と何れ宗教の爲に建たる者には相違なし洞中に三個の堂を築き北堂は佛教の偶像を祭り中堂は婆羅門教の偶像を祭り南堂は又た佛教の偶像を祭る而て天井は

皆な丸く掘り出し數本の石柱を以て之を支へ堂内に頗る巨大なる偶像あり婆羅門教の分は格別に大なる像あり此堂は想に佛教がシヤ井ニ教と成りシヤ井ニ教が婆羅門教と漸次に變遷したる者ならん歴史を調べ見に此地は紀元前六百年代に佛教が盛大なりしかと日に月に衰へ行てシヤ井ニ教が一時の勢力を占め遂に婆羅門教が彼等二教を歴倒し此地を專有したり

第三 カルリ Kari 府の舊寺

達觀拏 Dacan 領ブナ Rouna 府の傍に在る洞堂をカルリ府の洞堂と云ふ是は洞中に數多の堂を築き堂内に數多の室を有し仙人の住む室も在り食物を藏る倉庫も在り飲水を蓄る場所も在り然と聊も人の住跡を見ず

都て天井は丸形に造り廻廊は四條に分れ各自二本の柱を以て支へ美事なる彫物あり堂の長さ十四五丈あれども幅は四五丈に過ぎず周圍に丸木を列て壁の如く拵へ在に今尙腐朽せざるを見れば古き者に非ず

此堂は他の堂に異り神佛の偶像を祭れる所なく禮拜する場所も見當ず唯だ僧侶の用る傘の類を彼在此方に掘付たり而て堂の前に高さ石の柱を建て其上に獅子の像を乗せ玄關の如き一室に象の像を置き其上に鞍を乗せ馬下の如き人の像を二個ならべて象の像の兩側に裸体の男女の像を置く此等の像の細工は上品にて賞すべき者なり

堂の外に波利と云ふ文字を一面に彫み有り是は佛敎に用る梵字の原にて彫みし年代は紀元前五百年より紀元後七百年

年までなりとぬふ然ど是は信じがたき説なり何故なれば此時代は釋迦の死たる時代に當る故に信じがたき説なり其後佛敎が此地に勢力を得し事も在ば其頃に彫みし者ならんツ

井シヤ Vijaya 王 ガリヤ Galya 王 案達羅 Andhra 血統の王が即位せし年代は紀元後百年の頃にて確なる歴史に証據あり

第四 ナシキ Nāsik 府の舊寺

ナシキ府の洞堂はボンベ非 Bunday 府よりアングラ Angra 府へ行く道に在りナシキ府を距る三里にして其道峻峻なり洞堂の形は前に述べしカルリの洞堂に能く似り即ち堂の高き山の半腹に達し堂内に數多の室を設け互に通ずる事なからしむ

東の方に方形の小堂あり質朴なる建方にて堂内に數多の室を設け一室々々に人が倚子に腰を掛し像を置き壁に少年が

扇子を持ち或は中啓を持ち、兩足を組て坐し、像を彫み、在り尤も肩に掛し、衣と帯の紐に依り、婆羅門教の像と知る可ならず。北の隅に婦人、幼兒の像の在を以て、嗣子相續の婆羅門教なる事は判然せり。

洞中第一の珍き堂は廣大にて柱なき堂なり。入口は玄關を設け、堂内數多の室を分け、兩側に小室を設く。是れ仙人の室なり。といふ室毎に禮拜する場所あり。石の寢床あり。然ど人の住し証據は、一も見を得ず。玄關には柱あり。百端の彫物を爲し、正面に梵字の額を掲げ、たれど世の學士は未だ之を翻譯し得ず。故に何の意味なるや、知れる者なし。洞中に未だ落成せずして、古く成し、廣大なる一堂あり。是は全く普請最中に止を得ざるの事ありて、不意に中止したる者なり。

るべけれど、確乎たる証據なり。想に回々、教徒が天竺へ侵入したる頃ならん。

第五 アシヤンタ Adjanta の舊寺

アシヤンタ府マプチヨ河の近傍に在る山の中に、ナシコンニッ府の洞堂に等き舊寺數多あり。此等の舊寺は皆な美麗の裝飾を爲し、大に人の目を驚かしむ。

堂の數は二十七あり。其中仙人の住し堂と云ふ者が二十二あり。尤も佛敎の堂は僅に二あるのみなれど、他の堂に比て特に美麗なる裝飾あり。佛像人形なども格別上等にて、人形は舊希臘國のアレキサンドル Alexandre 王の書に記し、在る如き。獨印度人の衣服を纏ひ、帯を全体へ巻付たる摸樣なり。

第六 マハヴリプラ Mahablipuram 府の舊七寺院

マドラス Madras 府とボンガゼリ Pondichery 府の間に在る石山に堀
 穿てる洞堂をマハトリプラの舊七寺院と云ふ是は最も有名
 なる古跡にて婆羅門教の婆稚と云ふ神の爲に建たる者な
 り昔時は大堂七個ありしかど漸次破壊して今は四個を存す
 其中ウヒスヌ神摩醯伐羅の神の古跡と稱する者あり
 一大巖石を穿ちし者にて中には座虎の背の上に立て石の天井
 を支へ細密の彫物を持つる石柱數多あり
 此所を僅に離れ昔時の街の跡に頗る大石を以て最も堅固に
 建築せる小室あり室内にウヒスヌ神の像を祭る其像は大蛇
 の上に坐し大蛇は七の頭を以て什の如く神像の頭上を覆ひ
 左右に太き棒を携し番兵の如き二人の像あり其傍に摩醯
 伐羅神突迦 Douera 神の像を祭る此像は獅子に跨り牛頭の神を

打倒せし有様なり牛頭の神はエムラシヤ Yallai 神と云ふ
 尙は少く離れ廣大なる巖洞あり美麗なる彫物にて婦人が二
 個の幼児を懷る像を海に向て安置せり奇妙なる細工にて誰
 しも感せね者なし
 是より十四五間ほど離れ森の中に一の洞堂あり獅子の像を
 多く刻み堂は未だ全く成就せし者には非ざるべしと思はる
 能く調べ見に紀元後千百年代にノルトアルコト North Arcot の領
 地に於て建し佛教の寺院に似たり
 以上列記する古跡の外に數多の古跡あり佛教の説く所に依
 り阿育王一代中に釋迦の紀念の爲め建し寺院洞堂石碑の類
 は凡そ八万有餘ありといふ然ど數多の學者が力を竭て調べ
 揚し所の者は僅に四十有餘なり古跡は學問上一寶物にて大

切なる者なれば英國政府は文部省の博士達を多く天竺へ贈り頻に土地の風俗口傳碑文等を調査して止ざれども佛教に説く所の夥多の古跡は未だ認め得ず今尙研究最中なり假令は舊アシリヤ Assyria 國の古跡を調る万國の學者が碑文に依て舊猶太人即紀元前舊約全書の証據を細密に知が如く天竺古跡の研究に依り歴史の証據に組合し判然たる場合に至れる者なり

阿育王の死後數年を経て北天竺即印度シナヤ Bactria 血統の小國王等相謀て數多の僧侶を集め一大會議を開き釋迦眞説の經論戒律を變交せし事あり所謂マハヤナ Mahayana 大乘ヒナヤナ Hinayana 小乗の分など是なり然に南天竺即印度の原の土人は釋迦眞説の經論戒律を其儘に守り北天竺の小蕃人のみ此

會議にて變交せし誤謬の經論戒律に従へり
 米國の學士デウイス Divy Davis 氏は此北天竺の佛教を細に調べて曰く南天竺暹羅 Siam 國ビルマ Birman 國に於て佛教の根本を爲る所は釋迦の眞説藏 Pali 經書にて變交せし箇條なり然と北天竺其外尼波羅 Nepal 西藏 Tibet 蒙古支那日本等は佛教に大なる變交あり西藏のラマ Lama 教が初め聊か天主公教に倣ひラマと云ふ一の王を立し後は百般の宗規が漸次と天主公教に等しく成し如く佛教が初め聊か釋迦眞説の經論戒律を變交し漸次と變交に變交を加へ遂に全く反對の有様と成て百端の偶像を造り出し佛の名も多くなり成て肝心の釋迦の名は却て知ぬ人も多く在り彼波瀾迦佛陀 Paccaka Buddhas 即ち緣覺を立し後には日に月に其類の者が殖て紀元後四百年に支那の法顯三藏

Plinius が天竺へ行し時の日記に認め在る曼珠菩薩觀世音菩薩等の拜禮は已に北天竺に於て甚だ盛なり一斯の如く推察を以て多の佛を組立し原因は確に知す尤も藏 Plinius 書神童遊戯經 Valmiki 書などに於て毫も見ざる所なり想に婆羅門教の偶像哲學等に染られたる者の業なるべし最初の菩薩は已に彼薩曇分陀利經 Sūharṇa Pundarikā Sūtra 即法華經の中に顯はれたり
 最初の菩薩は二箇なり一が日増に殖て彌那佛陀 Dhyani Buddhas と云ふ過去七佛の説が起る併し是は誠に新しき事にて法華三藏羅什玄奘などの天竺へ渡し頃は影だに見へず况や藏書神童遊戯經薩曇分陀利經書に於て見べき筈なり中に就て阿彌陀婆那 Amida の説は最も新く且つ恐なる説なり阿彌陀

婆那とは世人の阿彌陀佛と稱する者にて無量壽とも無量光とも稱する者なり彼は常に觀音勢至の二菩薩を從へ遂に釋迦如來と成て世に顯れ衆生を極樂へ導き無量の快樂を與ふ杯と種々の方便を設け大乘の論を立て世人を瞞着せし者にて信じ難き事のみ云へり
 能く糺し見ば此等の事柄はグノスチック Gnostic の説に似り紀元後一百年代に舊希臘國のグノスチックと云ふ哲學者が新約全書の文意を誤解し剩へ自己の憶説を加へ多の神を造り出し世人を瞞着せし事あり是をグノスチックの説と云ふ佛敎も其頃波斯 Persia 國中に最も勢力の在り天主公敎の説を誤解し自己の憶説を加へ斯の如く數多の佛を造り出せし者なるべし如何となれば釋迦の經論と反對し釋迦の經論を打

消たる事の多ければなり
 然ば彼等は釋迦の名に依り雖も釋迦の説一最と感ず可き哲
 學と道徳を忘却し互に相争て別派を組織し別派に又た別派
 を生じ枝葉繁茂して幹を枯すの嘆なき能はず殊に釋迦が嚴
 く誠め置し吉凶占考人相方位の類を尊び北天竺中に釋迦の
 説を採し眞の佛敎は蹤跡を絶に至り彼瑜伽部等書即瑜伽
 密經の基礎と爲て婆羅門敎の占考所稱を混合せしマハヤナ
 Mahayana 即ち大乘法のみ流行せり

此大乘法の開基とも云べき者はベッシャルール Poshwar と云
 ふ地に産れし無著と云ふ賢僧にて紀元後五百年の頃に百端の
 修行を爲し瑜伽部論 Yogacharabhumisutra と云ふ書を著し偽の
 神を祭り西藏 Tibet 及バンナヤナ Bannayana 領の番人を導き遂に惡

鬼を祭る是は婆羅門敎の習慣を佛敎の中に加へ婆羅門敎徒
 を佛敎に誘引せし者なり故に陀羅尼 Dharmī 經蔓陀羅 Mandala 經
 の類が續て顯れ寺院の中に禪那 Dhyani Buddha 佛瑜伽部等の偶像
 を安置し目の多く在る像や頭の多く在る像を祭り夜叉鬼神
 などの恐しげなる像も在りシヨルマ GORGI 師の西藏書に在
 る寺院の裝飾に男女抱合し裸体の像を彫みし所あり斯る不
 潔の談は口を閉て云ざる方よし耳を塞で聞ざる方よしとあ
 り其他のリースデヒス Rishidhis 學士を初め夥多の研究學者も
 皆な北天竺の佛敎には驚愕せり

天竺古跡研究學者ブルヌフ Burnouf 師の印度佛敎と題せる書わ
 り其書の序文に曰く瑜伽部論の原書を調べ見に此論派
 の魁旨は全く龍樹菩薩の如し龍樹菩薩の著書夥多あれと余

が手に持る者は僅に般伽迦羅摩 Panakama 書と其註釋本瑜伽
 部 Yogicanta 書のみなり此等の書は都て蔓陀羅所禱の事のみな
 らず推察の菩薩や佛の名を多く掲げ釋迦眞説の修多羅書に
 於て見ざる聞ざる事のみ全く是は瑜伽部論派の甲乙が止を
 得ざるに出たるの策ならん意の解し難き所も多く在て斯の
 如き書は頭痛の種と成り大に人の健康を害する者なり殊に
 釋迦眞説の感ず可き哲學と道徳を放棄せし者にて人の道を
 教ふる心は更に莫し唯に人を自己の黨派に誘引する手段のみ
 誠に釋迦眞説の佛教と反對する者なり看よ終の章に佛道修
 行の仙人は其妻娘姉妹伯母等皆同一なれば隨て其待遇も同
 一ならざる可からずと在り斯る愧べく憎べき説は我れ之を
 見る能はず聞く能はず語る能はず書く能はず云々

此瑜伽部 Yogicanta 論は紀元後六百二十年に支那の玄奘が天竺
 へ渡り無著の修行せし寺院にて學び之を支那に傳へ日本嵯
 峨天皇の御宇に空海が支那へ渡り哲學の特別なる價直ある
 者と思ひ熱心に研究し日本へ携へ歸り眞言宗を創たる者な
 り此般伽迦羅摩 Panakama 書の作者龍樹菩薩は六宗七宗の祖師
 と呼れ一向宗の開基親鸞も之を七高祖の第一に置て大に尊
 崇せり
 天竺に於て迦膩色迦 Kaniska 王の助力に依り此大乘法が大に
 弘まりインドスタン Hindustan 領に蔓延す茲に於て小乘法と七
 百年間の紛争を換起し遂に佛教は二種に分れ支那の玄奘三
 藏が紀元後六百二十九年より六百四十五年まで十六年間天
 竺地方を巡回し佛教を研究せし時代にも互に争ひ其機に乗

じ婆羅門教が横合より突出して大に佛教を攻撃し佛教は他
 蕃の宗教にて上蕃の我等が守る可き者に非ず我等上蕃の者
 は大に他蕃の習慣を卑しに非ずや然ば他蕃の宗教なる佛教
 をも排斥せざるべからずとて頻に人を誘導せり
 佛教は温順謙遜の勸め在りて雖も斯の如く互に攻撃し殘酷な
 る所業をも在りしがと其苦を避る爲め二万餘の天竺人が脱走
 して爪哇 Java 一名ジャガタラ Javahra 島に至り紀元後四百年
 に法顯三藏が支那よりジャガタラ島に渡り頃には數多の天竺
 人が島中各所に住居せり法顯書に曰く天竺の婆
 羅門師が佛教に追立られ逃走して遠くカンボジャ Cambodia に至
 り一の寺院を建築す今尚アンゴール Angkor 領地に古跡を見
 る其後婆羅門師の勢力強盛と爲り數多の佛僧が天竺を追出



され止を得ずジャガタラ島に至り此島に佛教を弘む是は紀
 元後五百年の頃なりとあり
 其際婆羅門師は勢に乗じ佛教の種族を撲滅せんと欲し富蘭
 那 Purana 書に讀み當る如く舊刹帝利耶 Brahmin 族の華人を極て
 下等の種族と爲し代に新刹帝利耶族を組織し其中アプ山
 の島羅閣補羅 Radjapala 蕃人を格別に用て新刹帝利耶族と爲し
 佛教を攻撃したれば人皆此族を國王の血統の如く尊び敬ふ
 此族は今の島羅閣補羅人なり
 紀元後四百年に支那の法顯が天竺へ渡り時はアフガニスタ
 ン Afghanistan 領地より安都河岸まで大に佛僧を尊敬し隨て寺院
 も婆羅門教の寺院に亞ぐ者ありしが夫より二百餘年を経て
 玄奘の天竺へ渡り時は佛教が婆羅門教に壓倒せられて佛教

の寺院は漸次に廢壞し阿育王迦膩色迦 Kanishka 王の建築せし
 塔の傍に婆羅門教の寺院を建築し偶々佛敎を信する者あ
 りと以前は數萬の僧侶が住し寺院も空房寂室たるのみ又た
 中天竺羯若鞠閣 Kanjavalika 是れ即ち今のカノヂ Kanjivari 領地
 に於て阿育王に亞ぐ程の佛敎信者尸羅阿迭多 Sindhya 王の城
 下も寺院百餘僧侶一万前後に過す却て婆羅門教が盛大なり
 し
 玄奘の日記を見に紀元後六百三十四年尸羅阿迭多王の命に
 依り城下に一大會議を開く此時罽國の王二十一名が議員と
 成り佛僧婆羅門師なども多く出席したるが蓋より合ざる
 佛僧と婆羅門師の間に紛議葛藤を生じ遂に宗敎の大議論
 と成り結局佛僧は屈する色ありしが其後尸羅阿迭多王は

ラハット Mihinda 城下の近傍に在る平原に於て數萬の佛僧と
 婆羅門師を集め所有の財産寶物を悉く施行し王冠爵位を棄
 て忽ち剃髮染衣の身と成り釋迦の教に従ひ乞食托鉢の行者
 と變じ熱心の信仰を顯はしたり云々と在り
 玄奘が天竺へ渡し後三百年を経て佛敎は全く滅亡し其代に
 婆羅門教が頗る盛大と成り紀元後千四百年に中大竺の深多
 般 Sudhanvan と云ふ王の嚴重なる布告あり曰く南天竺雪山に至
 るまで我飢地内に住む人民の中に佛敎を信する者あらば老者
 男女の區別なく悉く殺す可と故に今佛マドラ Mithila 府の寺院
 に在る古き石碑の文を見に昔時婆羅門師が跋摩那 Mithila 人
 即佛僧を慘酷にも責殺たる狀況を詳しく記せり併し佛敎の
 滅亡は百端なる原因あり第二卷の第二章に於て説し如し釋

迦の誕生以前トニヤンIranian 蕃人其他夥多の蕃人が北方より侵入して天竺に止り彼等の子孫は大に婆羅門師を嫌ひ佛教を信仰し且阿利耶Aryans人の組に入を厭ひ刹帝利Kshatriyasの族に入し蕃人も亦た婆羅門師の壓制を避て佛教を信仰し阿育王の死後天竺へ入し舊希臘人も佛教を信仰したれば婆羅門師は大に憤發し佛教を國賊の如く仇敵の如く看做し在來の天竺人民に愛國の心を起さしめたり是は婆羅門師の美譽と稱すべし如何となれば在來の天竺人民は他蕃の者に蔑視せられて人間ならざる者の如くゾヂユ即ち鬼らしき者と云ふ名を付られしを婆羅門師が反對に出て他蕃の者を卑め在來の天竺人民を尊び彼等の習慣を己が宗教の中に加へ舊伏陀の書の意義を變交し租々の方便を以て在來の天竺人民

を導き佛教撲滅の基を開き一者のなり佛教の滅亡したるは紀元後千百年代にて今より七百有餘年前なり然ど今尙錫蘭Ceylon 島及亞細亞東部に凡そ五億万人の佛教信者あり併し是等は名のみ存して實なき者なり元來佛教信者は妄信にて教理など辨たる者なし現に日本の佛教信者を見て知る可し斯の如く佛教は天竺に於て千五六百年間勢力を得て他蕃の人は勿論婆羅門教の蕃人も一時は多く佛教信者と成上かど遂に滅亡し再び婆羅門教が勢力を得て婆羅門師は世に出たれど佛教の風俗習慣を切に除く時は却て人望を失する恐ある故に狡猾手段を以て佛教の風俗習慣を己が宗教の風俗習慣と爲したる其狡猾手段の工なるは感するに餘あり紀元後千百年代即ち佛教滅亡の時代に組立し聖書ウイス富蘭那

入帳大神は觀音菩薩の化現なり春日明神は勢至菩薩の變生なり杯と稱一大に入望を得たる事あり是は全く佛僧が婆羅門師の徹を蹈たる者なり

第六章 基督教と佛教の關係

基督教は佛教に似たる所あり故に基督教は佛教より出たる者と思ふ人も在べけれど是は大なる誤なり佛教は婆羅門教より出たる者にて婆羅門教は前章に數多の証據を掲て説く如く猶太教基督教の口傳風俗習慣より出たる者なり
佛説に佛法弘通の初め經論を一定し誤謬を防ぎ釋迦の誦律と道德を正く傳る爲め多の僧侶が會議を開と在は全く聖公會の察に倣へる者にて釋迦の十善誡は天主の十誡に擬へ釋迦の誕生は基督の聖誕に擬へ釋迦の説法は基督の福音に

擬へ釋徒外國傳道の事は宗徒外國傳道の事に擬へ其相續者の事は聖公會相續者の事に擬へ僧尼の雜類獨身は童貞男女の修業に倣へる者なり斯る類は尙ほ他に多し或る旅人の日記を見に西藏に於て佛僧をラマニと稱しラマの禮服儀式位階等級は都て聖公會の祭司に異なる所なく其他万端類似の箇條は擧て算がたしとあり

ウンテール Hunter 博士の印度國史にアレキサンドリア Alexandria と猶太の教會が佛教を摸し大に變し事を述べ無宗教徒は之に従ひ續て百端の妄説を吐と雖も一の証據を揚る能す却て婆羅門教佛教が基督教を摸し大に變し事は數多の証據を見に至る現今天竺支那日本に於て行ふ佛教の儀式は悉く基督教の儀式を摸せる者にて佛僧が舍利を拜禮する形容より佛

檀香臺香爐燭臺花瓶打敷禮服敷珠誦經詞節喚鐘等に至るまで
 皆な基督教より出たる者なり
 或人京都西本願寺の佛檀に在る物品を詳に調べ是は基督教
 の聖殿に在る物品と異なる事なし都て歐米各國に在る聖殿
 の粧飾は東亞細亞より傳たる者にて支那の仁保に蛇の頭を
 踏る觀音の立像と蛇の形を刻る天蓋の古物を保存す是は羅
 馬の聖殿に在る立像と天蓋に同と云り然と斯る説は旭に霜
 の消る如く古跡と歴史の証據に山て忽ち滅する者なり
 近時米國桑港に在る支那人が廣東より美麗なる婦人の畫を
 携へ來り慈悲の女神と云ひ既音と稱し且暮に拜禮す仰て之
 を見ば聖瑪理亞の像に似り依て詳く調べ見にキストリユス
 Nistorius 門派の教師が初て聖瑪理亞の像を支那へ渡せし事あり

り然ば支那に於て觀音の最初は紀元後一千四百年代なり
 歴史を照し見ば基督は釋迦の後に在り然と基督は釋迦を換
 範に聖公會を組織し給ふ者に非ず若し基督が換範を要し給
 ふ時は自己の手許に充分なる模範あり今其二三を擧て云ば
 教義訓律を調る爲め會議を開く事は釋迦の七百年前に大聖
 毎悉が七十餘名の老人を募集せし模範あり是をサテトリヌ
 Panhedin 會と云ふ又た修業の事は紀元前九百年代に聖エリセ
 ウス Erisus 聖エリヤス Eris 等の徒弟が世俗を離れ寺院に住居
 せし模範あり今尙ゼリユ Jurilio カルナル Cunnis 等に彼等の住し
 寺院の古跡を存す
 佛敎は基督教を摸せし者にて經論口傳儀式習慣に基督教と
 似る所の在は全く新舊兩約聖書の中より出たる者なり初め

猶太人が天竺へ舊約の説を傳へ次に宗徒トマス Thomas 聖人が
 新約の説を傳へ續て基督教人が交際を結び佛教組立の材料
 を與たる者にて歴史と古跡に確然たる証據あり
 舊約創世記及舊約太のヨセフ Joseph の歴史を見に天竺と西
 亞細亞の諸國は往古より交際せし者にて紀元前千八百年代
 に天竺の物産を船に積み波利斯 Persia 海 ユフラット Euphrates 河
 を渡り陸の群の商人が沙漠を越て大夏 Arabia フエニシヤ Phenicia
 エチオピア Egypt の各地へ運搬せし事あり
 サロモン Salomon 王の時代に至り沙漠の中に旅人の宿場を設け
 之をマドモール Madmor の街と稱し旅人が追従ベドイン Beduin
 番人の害を防た食を求る便りと爲し天竺と西亞細亞の諸國
 は物産の貿易盛大なりしが舊約馬の時代に至て止むアリ

Ilino と云ふ僑羅馬の歴史家は此街の模様を細に述て大に讚
 美し沙漠の中に人を助る必要の宿場と云り
 近頃佛國己里の教道學校に於て聖スルピス Sulpice 院のウヒグ
 ルス Vigouroux と云ふ學士が舊約証據論と云ふ書を著し世界の
 學者をして驚愕せしめたり此書は佛蘭西英吉利日耳曼等に
 集め在る舊アッシリヤ Assyria 舊エチオピア Egypt 等の古物を細密
 に調べ十有餘年の研究に夥多の証據を求め古代の景況を目
 前に見る如く述たる者にて實に希有の珍書なり
 ウヒグルス學士の説に依れば紀元前千七百年代に天竺と西亞
 細亞の諸國は盛に物産の貿易を爲し此頃アラビヤエチオ
 ンの商人は追従ベドイン番人の害を怖れヨルダン Jordan 河を
 渡り沙漠を眞直に行く事を得ず地中海の水涯をシドン府に

至リダンノDam領へ出て、サロント、Orelio河の堤を傳ひ、ユフラツト、Euphrates河の淺き所を渡り、タツボサツク、Chapsaqueの街へ出たる者なり。

斯の如く通行の道筋が皆、サロモン、Salomon王の領地なるを以て、王は旅人を護る爲め、リバン、Liban山より、ハマツト、Hamath城まで各地に臺場を築き、宿場を設け、遂にタツボサツクの街へ、眞直に行く近道を開き、沙漠の眞中へ、パルミール、Palmyraと云ふ城を拵へ、追剽の防と爲り、故に旅人は、ハマツトの城下を出て、パルミールの城下を過り、タツボサツクの街へ達する事と成り、大に便利を感じ、王の名譽は遠近に轟き、パルミールの城下は、示來千三百年間、格別に繁昌なりし。

サロモン王の死後、千有餘年を経て、舊羅馬の時代に至り、西亞

細亞諸國の商人が、パルミール、エルの城下へ運送し來る、天竺、其他各地の物産は、夥く、プリス、Pineの歴史を見に、舊羅馬の城下へ送る目的が、五億、セスタルス、Ostercus、即ち二億方圓なりしとあり。

サロモン王は、天竺と交際の便を圖り、父、ダビド、David王が、イド、メア、Idmea領、アイラ、Aira街を開し、故に自分、紅海の東浦に在る、アカバ、Akabaの港を開き、舊約、列王傳、第三卷、十五章に在る如く、ナール、Nair領、ヒラム、Hiram王の周旋に依て、船を造り、之を、メ、非ル、Ophirの海岸へ送り、金銀、象牙、猿、孔雀、寶石、香木等を購ひ、歸る船の往復、日數三年と在り、今も、大夏、Indiaの帆船が、紅海を渡り、天竺まで往復する日數は、三年なり、其後、二百五十年間、相續て、船の交際を爲し、アカバ、Akaba王の時代に至り、紀元前、七百四

十二年、リヤ王に此港を奪る

サロモン王が船を送し、チフィルの海岸は舊約ウラガ

ツトVilgate原書にチフィルと在り七十二賢は釋書にソフィル

Sphirと在り是は信度Indus河よりアブ山まで即ち今のカン

パCandayo海岸にて其頃ソウイルSuiw蕃人の住所なり又た

金銀象牙孔雀寶石香木等は初めエブレチIobooの語を用す

天竺の梵語を用し故に原書は今尙天竺に用る梵語を以て記

されたり

地理學の証據に依り天竺の海河山野に寶石香木の多く在し

事を知る可し時代は紀元前千年代にて猶太にエリヤスElias

エリゼチElijoシヨナスJonasチゼヤスOsasアホスAmos等の預

言者が顯れエリヤスが預言者を集め學校を開き修行の寺院

を創たる頃なり

紀元前七百廿一年アツンリヤAssyria國サルマナザルSinnazar王

が兵を帥て猶太に入りサマリヤSamariaの城を攻めサメラ

Israelの民を捕へ己が支配のメサヤMedia國エーザンGazan領バ

イラル城ハポールIador城などへ散せし事あり舊約列王傳

第四卷十七章にトビヤスTobiasの血統とチフヌリNephtaliの血統

に出し猶太人等はニ、ブNinoの城とラケスRagesの街へ移さ

れメガヤン國の虜と成し後二千年を経てゴーザン領に住と

在り紀元後千百年にトデルEndoleのメンシヤミンBenjaminと云

ふ猶太人が波利斯Parsinの南方へ旅行しサルマナザル王の時

代より此地に住て大に繁殖せし猶太人の蕃を認む其時の日

記に波利シの南方に旅行しゴーザン領ニスパールNieder山の

龍に於て夥多の猶太人を見る彼等の話を聞にアツシリヤ國
 カルマナサル王の爲に虜と成リダン Danザブロン Zabolon アビ
 ル Aser キフダリの子孫にて舊約列王傳第四卷十七章に彼は
 イスラエルの民を虜と爲リメシヤの山中ニハポール Haber 城
 下に移と在る金言に適へる者なり彼等の住所はエリザン河
 の邊に在て五十有餘の街を設け廿日の旅行を爲し得る程に
 廣し尤も彼等は獨立しジョゼフ Joseph と云ふ頭領とレド Laid
 派の奉行一人を持と在り
 斯の如く紀元前七百年代に亞細亞の諸國へ散されたる猶太
 人は皆な正さ説を傳へ續てアブガヤス Abias ミケアス Michas
 ナフム Nuhum 等の預言者おらはれ經論口傳律法を細に教へ猶
 太人は聖書を携へ亞細亞の諸國に於ては意味も文章も之に比

る程の書なかり一故に止を得ず之が説を盗み宗教と學術の
 進歩を圖り爲に宗教も學術も大に進歩せし者なり
 紀元前六百年に又アツシリヤ Assyria 國ナブコトノゾル王が
 Nabuchodonosor 兵を帥て猶太に入りゼルザレム Jerusalem の城を攻て
 數万の人民を虜と爲しアツシリヤ國の近傍より天竺まで弘
 たる己が領地へ散せし事あり是は未だ釋迦の生ざる前にて
 猶太の人民は舊約全書の三分二即ち每卷の五經判事書賢智
 書太剛の聖歌イザヤス Isaiah 書エレミヤス Jeremias 書の類を用た
 る項なり猶太の人民が虜と爲し間にダニエル Daniel と云ふ聖
 人が顯れ百端の奇跡を行ひ遂に其國の大臣と成り名を遠近
 に轟し猶太の人民は聖書を持て波利斯より東亞細亞の諸國
 へ渡り今尙西瀛に天竺支那の各所に子孫を遺せり

ブカナン Buchanan 博士の亞細亞基記を見るに天竺の
 Ceylon 領に猶太人の蕃あり黒猶太人と云ふ是は紀元前數百年
 代に渡り猶太人の子孫なり馬羅閣補羅 Malabar 領に同じ猶太人
 の蕃あり印度の軍勢に加り士官と成り兵卒と成り者を多く
 認む又波利斯北天竺達觀支那等五十六箇所に猶太人の蕃あ
 りアフガニスタン Afghanistan にも紀元前數百年代に渡り細太人
 の子孫あり紀元前二百年代に支那の中央に猶太人の盛なる
 街有し証據あらはる此項は毎巻の五經判事書サムエル Samuel
 書列王傳其他數多の豫言書を有し之を貴重せりとあり
 ヲカナン博士の説に依は信度 一 河を渡し猶太人は其他の
 土人と雜居し土人の習慣風俗に移り今は區別する能はず又
 た歐洲に一種特別の猶太人あり自らイスラエル人と云ひ決

て猶太人と云す想に之はイスラエル Israel の時代に分たる者
 にて最と古く此地に住居せる者なるべし
 研究學者は天竺の猶太人が昔時より保存せる聖書の原本を
 見と欲し多年探索を爲し遂に秣羅矩喃 Malabar 領に在る黒猶
 太人の會堂に於て一を認む即ち長さ五丈ある獸皮の掛物に
 て毎巻の五經を認め破し所は皮を以て修ひアラビヤ Arabia 國
 セナール Sennar 府より來れる者なり又カブル國の猶太人が毎
 年商法の爲め支那の内地に入り野牛の皮に認し毎巻の五經
 を見る事あり
 讀誦 Bible の末の作者が哲學の歌を造り鳩波尼沙陀 Dunsinnet
 の初め作者が哲學の經論を組織し摩拏 Manus 律法の作者が初
 て筆を採し前に當り天主は罰の如く猶太人の崩と成る事を

許容し給ひ此使を以て亞細亞洲一帯へ天主の聖教と聖誠を傳へ開闢以來の正き口傳を受しめ給へる者なり

紀元前五百廿六年波刺斯 Persia 國シルス Cyrus 王が布告を出し

廟と成し數十万の猶太人を本國へ返しゼルザレム Jerusalem の聖殿再建の許を與ふ此時本國へ返し者も多く在り

成し國に止る者も多く在り波刺斯大夏メヂヤ達鞭天竺支那等に子孫と毎世の五經を遺し僑約エステール Esther 書第八章に於てエステール女王の履歴を見にアスエルス Assuerus と云ふ國帝の時代に天竺の猶太人が多く金満家と成りアマニと云ふ大臣の憎を受けアマニは國帝に願を上げ猶太人を悉く殺す事の許を請ひ若し許を得ば波刺斯の留銀貨一万ドラク即ち百千万圓を納る約を爲す此時エステール女王

は天の助の如く猶太人を助け敵を殺す許を與ふ故に猶太人は七万有餘の敵を殺し續て數多の外教人に眞の教を授け在り是れ天竺人が古く天主の道に入し証據にてアスエルクてふ國帝は舊希臘の歴史に一世ゼールセス Darius 國帝と在り紀元前四百年代の人なり

紀元前六百四年ナブコドノゾル Nabuchodonosor 紀元前六百廿八年ダリユス Darius 紀元前五百廿七年シルス 紀元前五百十年アムスボ Hyastaspas の子のダリユス 紀元前四百六十四年アルタゼルセス Artaxerxes 等の諸王が即位の時に當り天主の全能を人民に布告し天主の道を弘る便と爲り尤もシルスは猶太人の廟を許し非スアムスボの子のダリユスは波刺斯に出し火の神を拜む教の元祖ゾロアストロ Zoroastro の勢力を挫きアルタセル

セスは自國の外に天竺、エチオピア、印度等の諸國を領し、何れも高名なる國王にて之が布告は亞細亞洲中に響き渡り長くアツシリヤ、アラビヤ、波斯の屬國たる印度には忽ち天主の道が弘り漸次に他の諸國へ蔓延せし事あり是は舊約全書と古跡の石碑に証據を存す

舊約ダニエル第六章に在るダリウス布告を見に我國全地の民よダニエルの天主を懼れ敬ふ可し彼は生て永く存し其國は亡す其權は終す彼は眞實なる救主なり蓋し多くの奇跡と體徴を見と在り此王の布告は學者の良心に貫き學者が純粹の理を悟る種と成て亞細亞洲中に響たる者なり此王の布告が支那の内地に響き大哲學者老子は眞理正道を求る爲め紀元前六百年にアンチリヤへ渡り猶太人の意見を

聞たる事あり佛國學士レムザンジュ氏の亞細亞研究書を見るに支那の老子は猶太及希臘へ渡り眞理の論議を携へ歸と在り蓋し希臘の哲學博士プラトン、Platon氏のロコス、Lucos及マリアン傳のウエルブン、Urban等と携へ歸たる者にてロコス、Lucosは希臘の語と云ふ義ウエルブンは天主の思ヲナン、Talinの語と云ふ義なり

紀元前五百年に至り支那に有名の孔子が顯れ同じ根本より奇妙なる説を出し後日此世に来る可き道と聖人の事を述べ一箇の聖人が西國に出て世を改革し人の罪を贖ひ心を正し行を改め苦難と耻辱を受て死し万世不朽の幸福を人に與へ未來永遠の道を開き云り之に依て紀元後六十五年に漢の明帝は使者を西國に遣し羅馬の屬國チヤンチユ、Chiantolo地方に

聖人を探ら合ひ然に使者は途中の西蔵に於て兩個の
 ヤン Chinn 人に邂逅し之を聖人と思ひ喜で伴ひ歸り教を聞
 ば聖人に非ず尋常普通の僧侶なりしかば明帝も大臣も之を
 退け漸く一人チエ Tchio 領の王のみ後へり
 歴史を調べ見に紀元前七百年の頃は數多の猶太人が支那の
 内地に住みゴービール Gumbi と云ふ博士の亞細亞研究書に在
 る如く或は博士と成り或は參議と成り或は奉行と成り或は
 教員と成り大體高官に昇りチヤキンキヤウ Chinkiao と云ふ大
 任を帯ぶる者も多く在て大に勢力を得たり
 天竺に於て其頃伏防の書中へ一体無形無始無終の書を編入
 し之を万物の根本と定め哲學の論が數派に分れ其後摩拏律
 法を初て定る時に至り釋迦が産れ佛敎を組織し聖羅門教は

大に變化を來せし者なり
 此等の事に就て考へ見に古く猶太人が亞細亞の諸國に散在
 し眞の道を傳し故に亞細亞の社會は改良し宗教も學術も漸
 次に進歩せし者なり然ばサンスクリット Sanskrit の聖書がヘ
 フレチ Eupro の聖書に似たる所あり摩拏律法が每瑟律法に似
 たる所ある事は怪に足ざるなり
 世界万国の人民が待兼し時代に及び即ち天竺の年號に云ふ
 義利踰健 Kilyuga 劫の三千一百一年に當り約束の如く基督が
 降生し給ひエヘサチ Ethesio の書翰一章九節に彼に於て天主が
 我等に其旨の蘊奥と心の儘に示し給ひ定の期の満に及て天
 に在り地に在る万物を基督に歸せしめたまふと在る言に應
 七十二宗徒が分て万国へ福音を傳る時バルトロメチ Bartholomao

聖人トマスは天竺へ渡り此地の人民に福音を傳た
 まひたり
 羅馬の歴史に初め十二宗徒が分て万国へ福音を傳る時に當
 りガリレヤ Galilee のバルトロメチは向の天竺へ渡り數多の人
 民を教化し百端の艱苦を嘗て遂に大アルメニヤ Armenia 領へ
 行と在り向と云は猶太に對する向にて信度河の東なり
 エゼプル Eusebius 聖人の書翰に曰くパンテマ Panteme 聖人は印度へ渡
 り彼地に於て既に福音を聞し者とヘブレチ Hebreo の字を以て
 認し馬太傳一冊を見る是は十二宗徒の一人なるバルトロメ
 チ聖人が前に福音を傳へ而て馬太傳一冊を遺せし者なり
 エロニモ Jerome 聖人の名人集書に曰くパンテマ 聖人は學問と
 人望を以て名を天竺まで轟せり故に天竺の人が聖人を招待

し聖人は天竺に至る而て聖人は彼地に於て馬太傳一冊を認
 め之を携てエザプト Egypte に歸る是はバルトロメチ聖人の遺
 物なり
 羅馬の歴史にガイウス Gaius 名する宗徒トマス聖人はガリレ
 ヤに産れ聖神降臨の後は福音を諸國に傳へ且バルチヤ Parthia
 人メヂヤ Media 人波刺斯 Persia 人に真正の信仰を勧め終に印度
 へ渡り基督の名に由て奇跡を行ひ天主の道を示し數多の人
 民を教化す然と偶像教に惑る國王の爲めカラミス Calanus と
 云ふ地に於て射殺され宗徒の恵の上に致命の恵を受と在
 斯る口傳は尙ほ他に多し紀元後二百年エザプト國チリゼス
 Origeno 師の歴史紀元後三百年エゼフ 聖人の歴史ナヂヤンゾ 領
 Gregorio 師の歴史紀元後四百年ソフロス

Sophon 師の書翰アンプロシヨの M. D. 聖人の日記紀元後五百
 年グレゴリヨ聖人の書翰紀元後六百年イシトル Isiore 聖人の
 書翰などを見て知る可し
 紀元後八百八十三年の僞サコン Sano 人の年記を見に大
 ルフレト Alfred 王が一人の司教を天竺へ送り宗徒トマス聖人
 の墓所へ代参せしめし事あり又た同じ時代に當るマホメツ
 ト Mahomet 人の旅日記を見に天竺のヘイトマ Beikuma と云ふ地
 に着す此地はトマス Thomas の城下と稱し誠に繁昌すとあり
 紀元後千二百年の頃には有名なる旅人あり名をマルコポーロ
 Marco Polo と云ふ此人の日記を見に宗徒トマス聖人の墓は天竺
 持瓊塔 Mulbar 館地に在り基督教人は絶す参詣マホメットの
 者も参詣す彼等は預言者の墓と云ひアベルアの墓と云ふア

ベルア Averna とは聖人と云ふ意味と在り
 今尙マラバル海岸のシロカシラ Sirochindia に在る基督教人
 の會堂に宗徒トマス聖人の履歴を認めし原書を大切に保存
 す之に由て見る時は宗徒トマス聖人は初てクランガノトル
 Cranganor へ渡り此地に七箇の教會を設け進でカリヤナフィル
 Calianapur に入り數多の人民を教化し遂に東の海岸へ渡りカラ
 ミ Calamine に於て致命の患を得たる者なり尤も今は天竺にカ
 ラミヌと云ふ名の所を見ず是は婆羅門教の勢力を以て一時
 數多の地名を改正したる事ありし故ならん
 カラミヌの教會は宗徒トマス聖人の死後數十年間經緯し司
 教祭司副祭司等も多く在り盛なりしが戦争の爲め領主は逃
 出され信者は攻られ遂に山の奥へ逃て西海岸の會堂に集り

其後マラバル海岸に住居を定たり
 紀元後百八十七年エガプト國アレキサンドリアAlexandria府の
 傳道學校に有名なる聖人ありパンテヌPanthenoと云ふ此人希
 世の智恵と學力を有し婆羅門師の招ふ應じ遠く天竺へ渡り
 數十年間彼地に止り宗徒バルトロメナBartholomeo 聖人の遺物
 なる馬太傳一冊を携へ歸り原の如く傳道學校の取締を爲せ
 り
 恰ど其の項は信天竺の地理學に悉き舊羅馬の學士アリエン
 Arrien氏マトレメナPtolmeo氏の生存せる時代にて天竺國王の
 使節が舊羅馬に到りトラシヤンTrasian 帝アンチニンAntonin
 に謁見せし事あり又た今世ボネンBonon 府サルセツSalsete
 島に残る土中より掘出せし婆羅門教の穴堂は其項出來たる

証據あり

聖公會の歴史を調べ見に其項新約全書の偽物が證方に顯れ
 グノマチツGnostique 哲學者の工夫に由りエガプトEgypt
 ヤSyriaを初め西亞細亞全地に弘り天竺まで散る其は基督
 の幼時と若年の言行に推察の斷を交たる者にて第一卷一章
 に述し如く婆羅門教の原書に在るサリウハオSilivahana 神
 Krishna 神の履歴は之を寫たる者なりモニエウイリヤンMonir
 William 氏ロリンゼールLorinser 氏の説に依ば薄伽梵伽陀Bhagavat
 Quid 書の下巻も其項編纂せし者にて新約全書の金言を偷み
 特に若翰傳の母の金言を其儘騰寫せし証據あり
 聖公會の信を試す爲め天主の許に由り絶す反對論者が起り
 波刺斯ParsiaのマチヌMinesと云ふ高名の論者がマニケチManicheo

の異説を支那天竺に弘め紀元後二百七十七年波刺斯國倍沙
 Misgar 領の主教アルナラウス Arcelanus 聖人が諸人の目前に於て
 マチスと眞理を論じ一言の下に彼を屈伏せしめたる事あり
 其後伏陀多 Vedanta 哲學の論者が天竺に起り天竺哲學論中第一
 高尙の説を吐て大に名譽を博す是は今尙黒 Kishin 領地に在
 る院庵落跋牙 Amavanti と云ふ佛法の寺を建築せし時代にて婆
 羅門教が初めて三位一体の説を唱へ出し婆羅吸摩 Brahma 黒
 Vishnu 摩醯 涇伐羅 Siva の三神を一体に結合たる頃なり
 希臘の學士ウイムフナルド Wilmfort 氏の印度日記を見に紀
 元後三百年にエチオピアのフルマンヌ Fulmineo と云ふ聖人
 が天竺へ渡り學問の力に由り國王の厚き待遇を受け遂に天
 竺の高位に昇り位の便を以て各地に會堂を設け基督の福音

を傳へ多の人を眞の道に誘ひ數年を経てエチオピアに返る其
 後アマナシヨ Athanasio 聖人の命を受け再び天竺へ渡り夥多の
 外教人を聖公會に入れた天主の光榮を顯し身は司教と爲て祭
 司の學校を開き修業の寺院を設け専ら布教に従事す古跡の
 証據を合せ見に恰と其頃支那の法顯三藏が天竺の北部へ渡
 り鏡迦 Ganges の川口へ来る然と佛教は未だ婆羅門教の如く盛
 ならざりしと在り兎も角も聖公會の歴史と舊羅馬の古跡と
 照し見ば天竺國王の使節が舊羅馬シユスナニアン Justinian 帝
 王に産物を捧し事は明瞭なり特に歐洲へ初て蠶を贈し者は
 天竺に在り聖公會の祭司二名にてエロニモ Jerome 聖人の書翰
 に天竺ヘルシヤエチオピア Ethiopia 等の祭司が修行の爲め多く
 舊羅馬へ來し事を載たり

紀元後三百廿五年コンスタンチン Constantin 帝の時に諸國の司
 教三百十八人がニセヤ Nicomedia と云ふ街に集り聖公會の大會議
 を開き天竺の司教も來る是は名をテオフィル Theophile と云
 折脚 Gazari 領シエウロ街に産れコンスタンチノブル Constantinople
 の學校を卒業し祭司と爲り司教に進みニセヤの大會議に於
 て波刺斯と天竺の大司教と定り教會の取締と成て大夏 Artax
 に趣き波刺斯海岸の會堂アデーナ Aten 會堂 マナル 會堂の三
 を建設すアデーナは今のアデン港 マナル 港は今のダ
 アール Dair 港なり其後古洲へ歸り天竺は各地を巡廻し數多
 の人を教化せし事あり金口と云ふシエマン Sajan Chrysostom 聖人
 の履歴に在るチリンパ Olympia と云ふ書翰の中に天竺 ヌウハラ
 Suphara 領の マルタ Marutha と云ふ司教がコンスタンチノブルの

大教會議に出と在り是は又た別の司教にて昔時より天竺に
 夥多の司教祭司の在り証據なり
 紀元後四百年にキストリヌス Nestorius と云ふ論派が西亞細亞
 に起り基督の教に迷ひ大に異教を擴張す依て聖公會はフェ
 ガヨ Ephesus と云ふ街に大會議を開き強く彼等を誡め彼等は遂
 に人の信認を失ひ止を得ず羅馬帝國の領地を去て波刺斯に
 至り彼國に於て各所に會堂を建築しバビロン Babylon の傍に
 在るセリウシヤ Solocia と云ふ街に大司教を置く其後天竺へ入
 り天竺に於て又た夥多の會堂を建築し天竺持理珞 Miliat 海
 岸に今尚キストリヌス論派の會堂と信者の子孫を存す
 紀元後五百廿五年に希臘のユスマインギコアルテスと云ふ
 Cosmas Indicopleustes 學士の編し聖公會の地理書第三卷に印度の南

に在るタフロバム *Tupubans* 島に聖公會の祭司と信者が多く住
 みマレ館に續くカリヤナ *Calliana* 街に司教の住居を設けソユ
 トラ *Socolora* 島に會堂を建築す此地の人民は先祖がアレキサン
 ドル *Alexandre* 王の位を續一プロレメチ *Plumeo* 王の時代に開拓
 の爲め送られし者なれば今に希臘語を川と在りカリヤナ街
 は今のマンガロール *Mangalore* の北に在るカリヤナブール *Kanapur*
 を指して云ふ尤も紀元後千年代に戦争の爲め一旦は潰れ再
 び川岸に建たる者にて其時司教はアンガマレ *Angamale* に移轉
 せし証據ありアセマニ *Assiani* と云ふ學士の著書にテサトシ
Theodose の司教の布告に依り支那の司教の事を云り是れ即ち
 アンガマレの司教が支那の司教を兼たる者のなりアルノブ
Indo の歴史に夥多のセール *Siris* 人が基督の教を受て在り此

セール人と云は支那西藏 *Siris* 等の人を指たる者にて最早其
 頃支那西藏等に基督教人の多く在り証據なり
 紀元後六百卅年に初て天竺へ行し支那の玄奘三藏の日記を
 見に天竺に於て婆羅門教と佛教の争闘は百年以上に及び婆
 羅門教が勢力を得て佛教は漸次に衰へ百年以前の建築に係
 る廣大美麗の堂塔伽藍も大体は崩と在り恰ど其頃は婆羅門
 教に有名の古刹マハヴリプラン *Mahavilpanam* 大堂を新築する最
 中にて諸國の大名が佛教を棄て婆羅門教を守り人民は再び
 昔時の習慣に立戻たる時代なり
 支那に於て一旦聖公會の盛なりし事は西洋の學者が研究の
 証據を由に及す天の恵に由り其國に判然たる証據あり即ち
 紀元後千六百廿五年に陝西州中 *Shensi* に昔時は長安と云ひ今

は西安Shanxiと云ふ府に住む人が家を建てる爲め地を掘り圖す
丈十尺幅五尺の大石を認め掘出て能く見れば頂上に十字聖象
を彫み正而に古代の文字を以て左の如き文あり

景教流行中國碑頌

大秦寺僧景淨述

B 尊若常然眞寂先々而无元。睿然靈虛後々而妙有。總玄樞而
造化。妙衆聖以元尊者。其唯我三一妙身无元眞主阿羅訶歟。
判十字以定四方。鼓元風而生二氣。暗空易而天地開。日月運
而晝夜作。匠成萬物。然立初人。別賜良和。令鎮化海。深元之性。
虛而不盈。靈蕩之心。本無希嗜。泪手娑羅施矣。飾純精。閭平
大於此是之中。際冥同于彼非之内。是以三百六十五種。肩隨
結轡。竟織法羅。或指物以託宗。或空有以論二。或祠祀以邀福。
或伐善以矯人。智慮營々。恩情役々。茫然無得。煎迫轉燒。積昧

亡途久迷休復于是

我三一分身。飛尊彌施訶。俄隱眞威。同人出代。神天宣慶。室女
誕聖于大秦。景宿告祥。波斯觀耀以來。貢圖廿四聖有說之舊
法。理家國于大猷。設三一淨風無言之新教。陶瓦用于正信。制
八境之度。鍊塵成眞。啓三常之門。開生滅死。懸景日以破暗府。
魔妄于是乎悉摧。掉慈航以登明宮。舍纒于是乎既濟。能事斯
畢。亭午昇眞。經留廿七部。張元化以發靈關。法浴水風。滌浮華
而潔虛白。印持十字。融四炤以令無拘。擊木震仁惠之音。東禮
趣生榮之路。存髮所以有外行。削頂所以無內情。不畜滅獲。均
貴賤于人。不聚貨財。示罄遺于我。齋以伏誠而成。戒以靜慎爲
固。七時禮讚。大庇存亡。七日一薦。洗心反素。眞常之道。妙而難
名。功用昭彰。強稱景教。惟道非聖不弘。聖非道不大。道聖符契。

天下文明。太宗文皇帝光華啓運。明聖臨人。大秦國有上德。曰阿羅本。占青雲而載真經。望風律以馳艱險。貞觀九祀。至于長安。帝使宰臣房公玄齡。總仗西郊。賓迎入內。翻經書殿。問道禁闈。深知正真。特令傳授。貞觀十有二年。秋七月。詔曰。道無常名。聖無常體。隨方設教。密濟群生。大秦國大德阿羅本。遠將經像。來獻土京。詳其教旨。玄妙無爲。觀其元宗。生成立要。詞無繁說。理有忘筌。濟物利人。宣行天下。所司。卽于京義寧坊。造大秦寺一所。度僧廿一人。宗周德喪。青駕西昇。巨唐道光。景風東扇。旋命有司。將帝寫真。轉摸寺壁。天姿沈彩。英朗景門。聖迹騰祥。永輝法界。案西域圖記。及漢魏史策。大秦國南結珊瑚之海。北極衆寶之山。西望仙境花林。東接長風弱水。其土出火纁布。返魂香。明月珠。夜光璧。俗無祕盜。人有樂康。法非景不行。主非德不

立土宇廣闢。文物昌明。高宗大帝。克恭續祖。潤色真宗。而于諸州。各置景寺。仍崇阿羅本。爲鎮國大法主。法流十道。國富元休。寺滿百城。家殷景福。聖歷年。釋子用壯。騰口於東周。先天末。下士大笑。訥謗于西鑄。有若僧首羅舍。大德及烈。並金方貴緒。物外高僧。共振玄綱。俱維絕紐。玄宗至道皇帝。令寧國等五王。親臨福宇。建立壇場。法棟暫撓。而更崇。道石時傾。而復正。天寶初。令大將軍高力士。送五聖寫真。寺內安置。賜絹百匹。奉慶容圖。龍綉。雖遠。弓劍可攀。日角舒光。天顏咫尺。三載。大秦國有僧倍和。于興慶宮。修功德。于是天題寺。榜額戴龍書。寶裝瑤翠。灼爍丹霞。睿札宏空。騰凌激日。龍賚北南山。峻極沛澤。與東海齊深。道無不可。所可及。名聖無不作。所作可述。肅宗文明皇帝。於靈

武等五郡。重立景寺。元善資而福祚開。大慶臨而皇業建。代宗文武皇帝。恢張聖運。從事無爲。每于降誕之辰。錫天香以告成。功頌御饌。以光景衆。且乾以美利。故能廣生。聖以體元。故能寧毒。我建中聖神文武皇帝。披八政以黜陟幽明。開九疇以唯新。景命化通玄理。祝無愧心。至于方大而虛。專靜而恕。廣慈救衆。苦善貸被群生者。我修行之大猷。汲引之階漸也。若使風雨時。天下靜。人能利物能清。存能昌。沒能樂。念生響應。情發自誠者。我景力能事之功用也。大施主金紫光祿大夫。同朔方節度副使。試殿中監。賜紫袈裟僧伴斯和。而好惡聞道勤行。遠自王舍之城。聿來中夏。術高三代。藝博十全。始効節于丹庭。乃策名于王張。中書令汾陽郡王。郭公子儀。初總戎于朔方也。肅宗俾之從邁。雖見新于臥內。不自異于行間。爲公爪牙。作軍耳目。能散

祿賜。不積于家。獻臨恩之頗黎。布辭憩之金闕。或仍其舊寺。或重廣法堂。崇飾廊宇。如羣斯飛。更効景門。依仁施利。每歲集四寺僧徒。虔事精供。備諸五旬。候者來而餽之。寒者來而衣之。病者療而起之。死者葬而安之。清節達姿。未聞斯美。白衣景士。今見其人。願刻洪碑。以揚休烈。詞曰

眞主无元。湛寂常然。權輿匠化。起地立天。分身出代。救度無邊。日昇暗滅。咸證眞玄。赫々文皇。道冠前王。乘時撥亂。乾廊坤張。明々景教。言歸我唐。翻經建寺。有歿舟航。百福偕作。萬邦之康。高宗纂祖。更築精宇。和宮敞朗。遍滿中土。眞道宣明。式封法主。人有樂康。物無灾苦。玄宗啓聖。克修眞正。御榜揚輝。天書蔚映。皇圖璀璨。率土高敬。庶績咸熙。人賴其慶。肅宗來復。天威引駕。聖日舒品。祥風掃夜。祚歸皇室。祚氛永謝。止沸定塵。造我區夏。

代宗孝義。德合天地。開貸生成。物資美利。香以報功。仁以作施。
 賜谷來威。月窟畢萃。建中終極。幸修明德。武肅四溟。文清萬域。
 燭臨人隱。鏡觀物色。六合昭蘇。百變取則。道極廣兮。應惟密。強
 名言兮。演三一。主能作兮。臣能述。建豐碑兮。元吉
 大唐建中二年歲在作噩太簇月七日大羅森文日建立
 時法主僧寧恕知東方之景衆也

朝議郎前行台州司士丞軍呂秀巖書
 佛國文部大臣デギニユ Dushin's 氏と有名の學士レムザ Ramusati 氏
 の訓に係る亞細亞研究書に此文の意味を釋て曰く唐の太宗
 皇帝公明正大の法を布き以て國を治め民を理す時に羅馬領
 大秦國の大聖チロペン Olopas 遠く支那へ渡る事を望み道を定
 る爲め沙漠に出で星を眺め忽ち暴風の兆し在を覺り之を避

る爲め飛が如く走が如く道を急げ貞觀九年即紀元後六百卅
 五年日本八皇卅五代欽明天皇即位七年に當り手に一卷の聖
 書を携へ長安に來す長安は今西安 Sian 府と云ふ皇帝歡喜の
 餘り太政大臣の位に在る房公玄齡玄奘と云ふ賢士を迎に
 出し一大行列を以て宮中へ招き遂に聖書を邦語に翻譯し群
 臣衆庶に示す群臣衆庶は之を見て眞理を探り或は聖師に就
 て濫與を極め大に天主の光榮を贊美す貞觀十有二年七月皇
 帝支那全國に詔を發て曰く道は一ならざるべからず民は和
 せざるべからず近頃上主の大道傳來し朕を感化す夫れ上主
 は無形の神靈なり故に教を布く必ず責任の人なかる可から
 ず之に由て大秦國の大導師チロペン其責任を帶て遠く我國
 に來り經典を宮中に獻す之を讀む再三再四に而て初て眞理

の在る所を知る是は之れ天下泰平上下和順の幸福を來べき者なり上主は即ち全能全智全善の神にて是より外には拜べき神なし依て之を國教と定む國中億兆の人民よ宜く朕が意を體し空論虚説の偽教を棄て疾く上主の命に順ひ惡を忘る事は恰も漁者の魚を得て網を忘る如く爲よ朕は熱心の官吏を撰み之に一切の支配を命じ上主の大道弘通の爲め至急義軍防Yimam府中に一の聖堂を建築し廿一名の祭司を置く可し周の亡し昔時は老子西國に行て道を求め唐の榮し今日は上主の眞道東國に來る聞く大秦國は上主の眞道に順ひ德義を重し竊盜殺人の患と詐偽詭譎の懼を知す德義の勝し人を撰み之を國王と定め土地は廣く文物は昌ん也と時に貞觀廿四年即紀元後六百五十年日本八皇廿七代孝德天皇白雉元年に

太宗帝位を其子高宗に禪り年號を永徽と改む高宗大帝は父に尋で天主の教を篤く信じサロベンを鎮國法主と爲し諸州に聖堂を建築す之に依て天主教は十道に弘り天主堂は百城に滿ち人民泰平を唄ひ千門万户老若男女の歡聲を聞ざる所なし其後中宗大帝の嗣聖十五年即紀元後六百九十八年日本八皇四十二代文武天皇即位二年に至り佛僧儒士の姪を受け罵詈譏諷に令ひ時の司教羅含Hany聖師と祭司四人が非常の憤發を以て之を防げ玄宗大帝の開元二年即ち紀元後七百十四年日本八皇四十三代元明天皇和銅七年に詔を發しニムカニHino初め四名の小國王を各地の天主堂に遣り祭司を補け儀式を執行す天主教は爲に再び光を顯し遂に反對論者を倒と在り此等の事は碑文の寫にAの印し在る所を照し見て知る

可一
 景淨 *Sanctus* と云ふ祭司の著述に係る基督教會畧史に肝要の意
 味を釋て曰く天主は自有者にて始なく終なく全能全知全善
 の徳を備へ万物を造り榮福を興へ聖人に上生を賜ふ即ち常
 に我等が拜敬尊崇する三位一体にて之をへブレナ *Holiness* の語
 にエホバ *Jehovah* と云ふ我主基督は十字架上に死し給ひ其十字
 架の四角の功徳が世界の四方に達し万民の靈魂を救ふ天主
 は初め黑暗荒秃に命て忽ち天地を顯し日月星辰を空に懸て
 夜を分ち土を以て人の體を造り息を賜て靈魂と爲し男女
 二人を一切人間の元祖と定め給ふ最初の人は純粹の善徳を
 棄け毫も惡を知ず分別に明に愛欲は正しく肉身に患難なく病
 死なし然に圖と惡魔の勸に迷ひ罪惡汚濁の人となり私欲我

慢に固り天主を忘れ子孫は偽を以て他を惑し遂に自ら偽を
 知す却て之を眞理と思ひ万物皆神と云ふ説を爲に至り其黨
 分離て三百六十餘派と成り互に弘通傳播の爲め爭論葛藤を
 生じ愈よ他を惑す今其二三を云ば或る派は我等眞神を見る
 能ず故に受造物中の一を撰み眞神の代に之を拜む可と云ひ
 或る派は何ぞ眞神あり人祖ある理あらんや万物許法一切皆
 空也と云ひ或る派は眞正の幸福を願ふ者は犠牲を多く献す
 可と云ひ或る派は天賦の良心に逆ひ自ら情を枉て野に極み
 山に住し麁服を纏ひ疎食を喰ひ専ら外面に善を粧ひ内裏に
 惡を工み密に邪の業を爲て耻す夫れ斯の如く世界は暗く人
 情は亂れ容易に眞理の大道を見る能はず時に吾主メシヤス
Messias 降生し給ふメシヤスは送られ者てふ義にて眞神の尊位

を秘匿し人間の姿を以て羅馬領大秦國に童貞女馬理亞に胎
 り誕生の時に入に一條の光明が顯れ光明の中に夥多の天使
 が聖歌を唄ひ音樂を奏し万民の幸福を祝す其後空中に一の
 異星が顯れ遠國の三王を導き來り諸國の人民も群り來て之
 を拜す尤も吾主メシヤス降生の事は先知聖人の豫言する所
 にて舊約廿四章に在る前徴の成就せし者なり之が一代の金
 言に由て國は豊に民は安く天主の光榮は顯れ三位一体の義
 を以て舊約に續く新約が定り眞正の宗教は漸次に弘る併し
 是は詞に由て弘る者に非ず全く信仰の一黠に由り身に善徳
 を行ひ万民の守る可き規則を貽し凡て世界の汚を洗ひ凡て
 世界の粕を除き万民の務を定め万民に必要の門を開き死を
 救ひ生と與へ愚蒙の黑暗を拂ひ智慧の光明を照し勇猛の流

者に依り慈悲の大船を迷海に渡すべ万民を榮福の地に渡し給
 へる故なり吾主メシヤス此等の事を盡し世界に福音廿七章
 を貽し置て遂に昇天し給ふ世界の万民は之に依り悔改を爲
 し天主の聖寵に潤ひ水と聖靈の洗禮を受けて心を清め惡を去
 り善に移る十字聖架は世界の万民を一個に組合たる徽章な
 り祭司あり木を擧て人を集め生命と幸福を祈る爲め東に向
 て拜し天主の慈悲を示す爲め福音を説く都て祭司は頭の周
 圍に聊か髪を畜へ宗徒の務に係る徴と爲し頭の中央に在る
 髪は悉く剃りて世を離れ妻子なく僕婢なく財産なく常に温順
 謙遜と齋戒謹慎を守り一日七度の祈禱と一周一度の祭禮を
 怠す死者と生者の爲に天主の恵を希ひ心を清し行を正す是
 は今尙聖公會に規則の如く存する所なり優劣強弱に依り全

知不全知の名を得に非ず道徳と行狀の如何に依り宗教の眞
 偽を知る可し眞道の通功は廣く世界を照と是は碑文の寫に
 Bの印し所在所を照し見て知る可し
 續て亞細亞研究書に曰く玄宗大帝が天寶三年即紀元後七百
 四十四年日本八皇四十五代聖武天皇天平十六年に復た大系
 國の祭司信和Hino支那に入り大帝に謁見す大帝滿面に笑を
 含て喜び忽ち祭司羅含Hiro普論Hiro其他五名に詔を下し興
 慶宮に於て信和と共に祭禮を行ひ講義を爲す事を命じ自ら
 筆を揮て會堂正面の額を染み諸人に信仰を催す之に依り萬
 民は多く悔改し天主教の恵を受け肅宗大帝乾元二年即紀元後
 七百五十七年日本八皇四十七代淳仁天皇寶曆三年に至り國
 中各地に天主教會を設け太平の眞域に達す其後第二の代宗

大帝武道に長じ無名の軍を起し人民を塗炭の中に苦む上の
 好む所は即ち下の好む所と爲り遂に人民洗滌し天主教の教に
 離れ反逆を爲に至る此に於て大帝は大に悔み是れ全く朕が
 祖先の意を破り天主教の教に背たる故なり然ば自ら心を改め
 行を正し天主の恵を受く可と急遽聖殿に參詣し高臺の前に
 香を燒き祈を捧げ大曆十四年即紀元後七百七十九年日本人
 皇四十九代光仁天皇寶龜十年の救主降誕祝日に大赦を施し
 大帝宮中に於て自ら基督の金言を説き群臣を饗應し貧民を
 救助す之に依り反逆の徒も亦た心を改め行を正し大帝の萬
 歳を天主に祈る事と成り再び太平を唄に至る大帝歡喜の餘
 り參議兼陸軍卿柳宗元に命じ一の石碑を建設す當時東部の
 基督教人は寧恕Ninxiu教正の支配を受と是は碑文の寫にCの

印^イ一^一在^在る所^所を照^照し見^見て知^知る可^可し
 斯^スの如^如く碑^碑文^文と歴^歴史^史の証^証據^據に依^依り熟^熟ら考^考へ見^見に紀^紀元^元後^後六^六百^百
 年^年代^代より支^支那^那にて基^基督^督教^教の勢^勢力^力を得^得し事^事は決^決て佛^佛教^教の比^比に
 非^非ず故^故に佛^佛教^教は自^自然^然と基^基督^督教^教に倣^倣ひ儀^儀式^式も多^多く基^基督^督教^教の儀^儀
 式^式を用^用ひ遂^遂に日^日本^本へ波^波及^及したる者^者ならん
 支^支那^那に有^有名^名の歴^歴史^史家^家馬^馬端^端理^理 Martini は理^理宗^宗皇^皇帝^帝の時^時代^代則^則日^日本^本
 人^人皇^皇九^九十^十五^五代^代後^後醍^醍醐^醐天^天皇^皇の時^時代^代に文^文獻^獻通^通と云^云ふ書^書を著^著し古^古
 き歴^歴史^史の証^証據^據を以^以て支^支那^那と日^日本^本の交^交通^通を説^説り今^今其^其大^大畧^畧を掲^掲
 て云^云は紀^紀元^元後^後二^二百^百四^四十^十年^年に神^神功^功后^后皇^皇 Jimmu の使^使者^者支^支那^那へ渡^渡
 り後^後漢^漢の献^献帝^帝に國^國書^書を捧^捧げ紀^紀元^元後^後三^三百^百十^十五^五年^年に西^西晋^晋愍^愍帝^帝の
 使^使者^者日^日本^本へ來^來り仁^仁德^德天^天皇^皇に謁^謁見^見し紀^紀元^元後^後四^四百^百十^十二^二年^年に東^東晋^晋
 安^安帝^帝の使^使者^者日^日本^本へ來^來り允^允恭^恭天^天皇^皇に謁^謁見^見し紀^紀元^元後^後五^五百^百五^五十^十二

年^年に高^高麗^麗の使^使者^者日^日本^本に入^入り欽^欽明^明 Jimin 天^天皇^皇に佛^佛像^像經^經卷^卷を献^献じ
 紀^紀元^元後^後五^五百^百八^八十^十八^八年^年に日^日本^本の佛^佛僧^僧支^支那^那へ渡^渡り崇^崇峻^峻天^天皇^皇の命^命
 に依^依り陳^陳の後^後主^主叔^叔寶^寶に見^見へ法^法華^華經^經の原^原書^書を求^求む紀^紀元^元後^後六^六百^百
 四^四十^十六^六年^年に孝^孝德^德天^天皇^皇の命^命を受け律^律師^師道^道と云^云ふ日^日本^本の佛^佛僧^僧が
 支^支那^那へ渡^渡り數^數年^年間^間長^長安^安府^府に止^止り玄^玄奘^奘の坐^坐側^側に於^於て佛^佛教^教の蘊^蘊
 奧^奧を研^研究^究し其^其後^後日^日本^本の道^道照^照定^定惠^惠と云^云ふ二^二人^人の佛^佛僧^僧も支^支那^那へ
 渡^渡り佛^佛教^教論^論派^派の一部分^分を研^研究^究す尤^尤も此^此頃^頃は支^支那^那に佛^佛教^教の盛^盛
 なる時^時にて玄^玄奘^奘 Hwansung が天^天竺^竺へ渡^渡り十^十六^六年^年間^間彼^彼地^地に止^止り佛^佛
 教^教の古^古跡^跡を調^調べ經^經論^論の奧^奧意^意を探^探り大^大乘^乘スウタラ Sūtras 百^百廿^廿四^四
 卷^卷の原^原書^書と律^律部^部論^論部^部其^其他^他哲^哲學^學諸^諸派^派の書^書類^類六^六百^百餘^餘卷^卷を携^携へ返^返
 り數^數多^多の書^書記^記者^者を長^長安^安府^府に集^集め皇^皇帝^帝の命^命に依^依り梵^梵語^語の原^原書^書
 を支^支那^那の國^國語^語に翻^翻譯^譯する最^最中^中なり故^故に支^支那^那へ行^行し日^日本^本の佛

僧は玄奘を初め、有名の知識に交り、且つ天主教會の司教祭司に遇ひ、太宗皇帝の時に建し、各地の天主堂も親く見たる者なり。其後道照 Dusho 定惠 日本に返り、道照は南都興福寺に於て法相宗 Hossoshon と三論宗 Sanronshon を弘め、定惠は南都東大寺に於て成實論宗を弘む。併し是等は純粹の宗教に非ず、哲學の一派にて學術なり。初め支那の玄奘が天竺へ行し、頃は天竺にウパニシヤ、Panishadas が重て顯れ、佛教が哲學に交り、婆羅門教の原書に一大變革の在たる頃にて、玄奘も哲學を重じ、哲學を以て佛教の經論に解釋を附し、玄奘の徒弟も皆な哲學の一方に傾き、道照定惠も之に倣ひ、哲學を宗教と誤認せし者なり。紀元後七百四十年、則日本八皇四十五代聖武天皇の御宇、乃至

り元册 Gundo と云ふ日本の僧僧が支那へ渡り、佛教の原書を測べ、俱舍論を携へ返り、南都東大寺と江州三井寺 Mikami に於て之を弘む。併し之も純粹の宗教に非ず、哲學の一派にて學術なり。紀元後八百年、則日本八皇五十代桓武天皇の御宇に、遣唐使橘逸勢の一行支那に入り、唐の徳宗皇帝に謁見す。此時佛僧最澄も從ひ行て十五年間、天台 Tiantai 山に止り、龍樹菩薩の註論を研究す。是はプラザユナバラミヌ Pradhna Paramita と云ふ原書の註釋なり。日本にて般若波羅密多經の註釋と稱す。最澄其間、知識に從ひ、摩訶止觀及法華玄義の意を探り、遂に三摩地の默想に係り、念佛祈願に身を委ぬ。元來最澄は桓武天皇の意に適ひ、格別の寵愛を蒙り、天皇の保護に依り、天台宗比叡山 Hieizan 延暦寺の開基と成り、後に傳教大師 Dengyodaishi の號を賜ふ。然と最澄の支

那に於て學び得し事と純粹の宗教に非ず啓學の一派にて學術なり
 紀元後八百年即延暦廿三年に復た桓武天皇の遣唐使藤原葛野麿の一行支那に入り徳宗皇帝に謁見す此時佛僧空海隨從し數年間天台山に止り佛敎の奥義を探る傍ら理學化學を修め更に數年間長安府に止り天竺より渡來せるアモガツクラ Amoghavajra 即ち不空金剛の弟子惠果に從ひ佛敎の奥義を探り得て深く天台及び眞言の哲學に感じ金剛般若彼羅密多經を携へ返り眞言宗高野山金剛峯寺の開基と成弘法大師 Shōnin の號を賜ふ併し空海が支那に於て學び得し事も純粹の宗教に非ず全く哲學の一派たるユーガチャラ Yogachara にて之を深密瑜伽論と譯し毘盧遮那世尊の印を結び之を眞言秘密と稱す

す毘盧遮那 Bishan 世尊は婆羅門敎のワルナ Varuna と云ふ神に擬たる者なり佛敎は都て婆羅門敎より出たる者にて婆羅門敎の臭氣を含と雖も此眞言宗は格別に多く含み偶像の摸樣も寺院の裝飾も婆羅門敎に同じ天竺へ行て婆羅門敎の偶像と寺院を見し人は之を能く知る可し現に京都の東寺に在る四天王 Shiteno の像を看よ婆羅門敎のデーワ Deva の四王を摸しドリマラスエタラ Dhritarashtra を持國天 Sicuten と云ひウヒルダカ Virudaka を増上天 Nitena と云ひウヒルバクシヤ Virupaksha を廣目天 Comocuten と云ひワイヌラマナ Vaisravana を多門天 Monju と云ひ具足道具もデーワと四王と異なる所なり其他の偶像も調べて見れば皆な婆羅門敎の偶像を摸せし者なり弘法大師の傳記と世人の口碑に依ば弘法大師は百端の奇術を行ひ其一代中

不可思議の多く在し事を述ぶ併し是も亦た天竺の學術を摸せし者にて眞の奇術不可思議に非ず弘法大師は其頃天竺に流行の因明論を研究し傍ら理學化學を修め日本へ返り未だ人の知ぬ事を行ひ自ら奇術と云ひ不可思議と稱し不學の愚民を瞞せしに外ならず

空海は紀元後八百廿二年即日本八皇五十二代嵯峨天皇の御宇弘仁十三年に歸朝し高雄御殿に於て天皇を初め奉り數多の有り司百官にアビセーカ Abhisheka と云ふ灌頂 (Crowning) の式を授け或は陀羅尼を讀み或は印を結ぶ頻に御所の平安を祈る此眞言宗に於て印を結ぶ事は眞言秘密の徴と稱し最も重する所にて十八道私記と云ふ書に在る規則を固く守り順序を逐て手指を屈伸し恰も公教會の祭司が祭禮の時に行ふ手指の式

の如し又た灌頂の式は耶穌基督の定め給ふ洗禮の式に似り其他百端の事に聖公會の摸と思ふ所の者は多く在て自ら顯れ研究學者の見る時は一目瞭然たり

空海の時代に於て日本の佛敎は大に面目を改たる者なり聖德太子の時代より有名なる道照 (Doshō) 定惠 (Dzōe) 元奘 (Genzō) を初め數多の僧侶相續て佛法弘通に力を尽し南都に法相三論俱舍成實等の哲學が盛に花を開と雖も空海は此等の花を外に見て遠く支那へ渡りウパニシヤマ Upanishada と云ふ哲學の一派を學び歸朝の後には十住心論を著し大に之を擴張す此頃支那の佛敎は既に面目を改め儀式万端天主敎會の聲に倣ひ空海は之を日本に携へ返り爲に日本の佛敎は面目を改たる者なり如何となれば前述の如く空海の長安に留り一時たるや我

が天主教の最上盛大なる時なればなり
 紀元後一千五十年即日本人皇七十六代近衛天皇の承治六
 年に至り法然上人 Hōnen Shōnin が日本に於て他力念佛往生浄土
 の法を探り得て浄土宗 Jōdo Shū の一派を開く法然上人は初め
 源空と呼び叡山の源光阿闍利に従ひ傍ら北谷の惠信僧都に
 教を受く遂に黒谷の開山と成り圓光大師の別を賜ふ此人一
 代の勸誘は専ら他力本願を説き一心一向に念佛し阿彌陀佛
 を頼む者は必ず極樂へ行と云ひ頻に念佛の功力を教へ而て
 授取式は聖公會の洗禮式を模し懺悔式は聖公會の告解式を
 模し佛供茶湯は聖公會の餅葡萄酒供へに擬へ行者の位階即
 ち優婆塞比丘聲聞緣覺菩薩の類は聖公會の品級式に擬へ施餼
 鬼洒水非儀香花燈明小詳忌大詳忌小練忌大練忌と云が如き

忌日の儀式は威な聖公會に堅く守る恩謝の儀式に擬へ死者
 の法名は聖公會の聖名に倣へる者なり是は日本の佛僧が支
 那へ渡り支那の佛僧が日本へ來り互に厚く交際せし所より
 遂に支那佛教の風俗が日本佛教の風俗と成たる者にて支那
 佛教の風俗は前に述し如く聖公會の風俗を摸せし者なり
 紀元後千八百八十年即日本人皇八十八代高倉天皇治承四年に至
 り親鸞上人 Shinran Shōnin が浄土真宗 Jōdo Shinshū の一派を開く此人
 最初叡山の慈鎮和尚に従ひ名を判實と呼び中頃吉水の室に
 入り源空の弟子と成名を善信と改め又た結空と呼び終に關
 白兼實公の娘を娶り肉食妻帯の身と成名を親鸞と改め浄土
 宗義の中に在る信心爲本の蕪奥を探り得て本願寺 Hongwanji を
 建設し死後六百餘年を經明治の初年に見真大師 Kinshin Daishi の

號を賜ふ抑此淨土眞宗に説く所は阿彌陀唯一佛を一心一向
 に頼む者は西方十萬億の佛土を過て眞の淨土に往生す尤も
 阿彌陀唯一佛は因位法藏比丘たる頃より世界一切衆生濟度
 の爲め骨と皮に疲れ乍ら凡夫成佛の手段を考へ自ら親見證
 佛淨土因國土人天之善惡と悟り四十八の本願を立て兆載不
 可思議永劫間の艱難辛苦を嘗め凡夫成佛せずば我も成佛せ
 ずと誓ひ遂に本願成就し給ふ南無阿彌陀佛の六字の名號は
 即ち本願成就の徴し也と云に在り是は天主教會に於て唯一
 眞利なる基督の救世のみ拜む事を撰たる者にて阿彌陀佛の
 艱難辛苦は基督の苦難に擬たる者なり尤も親鸞は婆羅門師
 の如く血統相續の法を立て自己の主義を維持し子孫に有各
 の人が顯れ大に親鸞の主義を擴張す即ち八代目に達如あり

十一代目に顯如あり達如は生涯山法師と戦ひ顯如は時の執
 政織田信長に抗し何れ日本全國に響き渡り程の豪傑にて驕
 慢なる子孫を殘し延て今日に及び恰もチベツト Tibet に於て
 忽ち必烈血縁が勢力を得て佛教はラマ王の手に落し如く日本
 に於て一時勢力を得たり然して眞宗派經論の組織および其
 儀式等を鮮明に探究する時は虚心平氣なる者の眼には必ず
 聖教公會の組織并に其儀式を摸寫したる事際々と顯現すべ
 し之れ余一人之を斷ずるにわらず日本の學士諸氏も恐くば
 口に視耳に聽しなるべし請ふ見よまゝる明治九年四月二日東
 京發兌の教海新聞を見よ該論者は眞宗を評して眞宗は基督
 教の如く思はるべし云々と云たり其他日々新聞朝野新聞等
 も此件に就ては議論囂々として湧が如き形状なりし事余は

猶胸間より脱却する能ざるなり
 紀元後一千二百五十二年即日本人皇八十五代後深草天皇の
 建長五年に至り日蓮上人 Nichiren Shonin が法華宗の Hokke-shon 一派を
 開く此人は初め鎌倉建長寺の大覺禪師に從ひ専ら佛敎の蓋
 與を探り遂に熾暴の人と成て念佛无間禪天魔眞言亡國律國
 賦と唱へ頻に他宗を駭撃し我慢の人を集め以て猛威を震へ
 る者なり去る明治十九年に東京發兌の新聞が法華宗を評て
 曰く是は天竺と支那の間に在る回敎の如と成程回敎はコー
 ラン(Corin)と云ふ人作の聖書に基き他宗を賤め他宗の信徒を
 墮落無間地獄と云ひ都て法華宗に能く似たり原はアラビヤ
 Arabia に起り除歩と天竺へ渡り支那の西南に入り雲南府の近
 傍に猛威を震へる者にて之が支那に勢力を得し時代は日蓮

が日本に於て法華宗を開たる時代より漸く數十年の前へに
 あたるなり然ば日蓮は之を撰せし者にや大ひに疑はし
 斯の如く日本佛敎の事を簡單に述べ續て支那の歴史と長安
 の石碑を據証に數百年間中亞細亞支那地方に基督教の響し
 事を述ぶ左の如し
 紀元後一千百七十六年即ち日本人皇八十代高倉天皇安元二
 年宋朝十一代孝宗皇帝淳熙三年に達韃のトクエルウヌカン
 Thoguel Ung Khan と云ふ大將が法王アレキサンドル Alexandre 三世に
 書を呈し自費を以て羅馬に一の會堂を建築し聖ペトロ Petro
 殿の中に一の香臺を設けゼルザレム Jerusalem に在る耶穌御棺
 聖殿の中に亦た一の香臺を設け達韃の賢哲英士を其所へ送
 り宗教の奥義を研究せしめん事を請ふ法王は翌年九月廿八

日に至り詔を發て之を諾し給ひ其後達鞏に屈指の人物が多
 く宗教の興義を極め天主の聖寵に依り信徳の道義を重じ夥
 多の男女を教化す
 紀元後一千二百三年即日本八十八三代土御門天皇建仁三
 年宋朝十三代徽宗皇帝嘉泰三年鉄木戸(Chunshu)是即太祖と
 云ふ達鞏蒙古の大將が遣物者即天主を悟り天主は人を生に
 死に富に貧に貴に賤に賢に愚に左に右する權威あり一体なる
 天主こそ全能ある大主なれ外に拜む可き神は莫し故に汝等
 天主を拜み天主の恩を謝す可と達鞏蒙古の人民に示せし事
 あり今尙達鞏のカラコラ(Chagatai)に住ひゲンガスカンの子
 孫は皆な基督教を奉じ眞の道を歩くと云ふ
 紀元後一千二百四十四年即日本八十七代後醍醐天皇寛

元四年宗朝十四代理宗皇帝淳祐五年に法王イノセント Innocent
 四世が達鞏國民の爲に聖トミニニコ Dominic 門派と聖フランシ
 ススコ Francisco 門派の教師を其國へ送り人民の風俗習慣を改良
 せし事あり此時聖トミニニコ門派の教師が蒙古に至りパチユ
 Pacionと云ふ大將の館に止り蒙古の人民を教へ風俗習慣を改
 良し三年を経て大將の使節を作ひ書翰を携へ羅馬に返り其
 後フランシスコ門派の教師が再び達鞏に入りブーラン、カル
 ジンのマヨアン Jean de Plain Curpin の誘導に依りゲンガスカン
 の嫡孫パトウ Billu 大將に見へ宗教の濫興を語り館の傍に一
 の會堂を建設し朝夕パトウ大將を初め其母其子カユク Kaiouck
 及び群臣が天主を賛美せし事あり
 紀元後一千二百四十九年即日本八十八代後深草天皇建

長元年宗朝理宗皇帝淳祐九年に達鞏のイルチカマイ Dulikhan
 と云ふ大將が佛國ルイス Louis 大帝の許へ使節を送り佛國ル
 イス大帝も亦た達鞏イルチカマイ大將の許へ使節を送る此
 時トニコ門派の教師三名及夥多の官吏が達鞏へ入り教師
 は専ら傳道に尽力し天主の光榮を顯し都鄙の人民を教化す
 其後四年を経て佛國ルイス大帝は聖フランセスコ門派のル
 プルキスのギリヨム Guillaume de Rubripis と云ふ師長の勅に従ひ達
 鞏へ使節を送り使節はマングカン Mangou Khan と云ふ達鞏の國
 王に見へ永く國王の宮殿に止る尤も宮殿の中に夥多チスト
 リユス Nestorius 論派の祭司と他の基督教人ありしがマングカ
 ン世を去て元の忽必烈が達鞏の國王と成り猛威を震て近國
 へ侵入し遂に支那の南に在るトンキン Tonkin チベットを初

め其他の小國を悉く領地と爲す當時佛教は一の頭領を定め
 官名をボザメルマ Bodhirama と呼大に勢力を得てチベット Tibet
 を己が領地の如く支配し今にチベットは佛教の頭領が國王
 の資格を以て人民に接し之をダライラマ Dalai Lama と云ふ
 レムザ Pomsal 氏の亞細亞研究書を見に釋迦の死後はチベット
 の人民が大にボザメルマを敬ひ僧侶の種族が非常に勢力を
 得て凡そ八百年間は最上の位地を占め達鞏の大將も一步を
 譲り僧侶に尊を興へ大切に取扱と雖も未だ地を興す忽必烈
 が達鞏の國王と成し時に初てチベットを興へ佛教の頭領を
 ラマ Lama 王と稱し年を経て蒙古の大將が佛教の頭領をマ
 イラマと稱す是は海の廣が如く徳の勝し僧と云ふ義にて是
 より人民が迷に沈み佛教の頭領を生身菩薩と以て至と在り

佛教が頭領を定めチベットに勢力を得し頃は達鞏及達鞏の
 國地に夥多の基督教人が住み殊更チストリニス論派の傳道
 士が諸方に會堂を建築し専ら布教に尽力す尤も忽必烈の威
 名は遠近に響き諸國の帝王が競て達鞏へ使節を送り親密の
 交際を求め羅馬法王と佛國大帝は聖公會の傳道士を送り彼
 等に命て國王の殿中に香臺を設け聖器を備へ一大儀式を執
 行せしめ一かば國王を初め貴族紳士が大に感じ各自住居の
 近傍に會堂を建築し貴族紳士の中に基督教人と成る者も多
 く在り國王は佛國へ使節を送り里邱府の大會堂に於て聖公
 會の大會議に與り祭司の等級と祭禮の儀式を詳く訓べ法王
 クレマンツ五世の勅に依り北京に一大會堂を建築す此
 時は羅馬のモンコールウヒヌのシヨアン Jand Monteorin と云ふ

司教が出張し會堂の周圍に油繪の聖像を飾り三個の釣鐘を
 掛て祭禮の時刻を告る用に供し普請落成の日に夥多の基督
 教人を集め開堂の式を行ひ其後相續て該堂に盛典を揚ぐ此
 頃達鞏蒙古の中に基督教人回々教人偶像教人相混て住たる
 者なり
 チベットの人民は達鞏蒙古に在る基督教人の風俗と聖公會
 の儀式を見て大に感じ鋌に心を傾る者の多く在り依り既に
 チベットに於て勢力を得し佛教の僧侶は胸を痛め頻に工夫
 を施し聖公會の儀式を已が儀式に用ひ佛國の使節と羅馬の
 使節に基督教人の風俗を細に聞て已が風俗を改め漸く人民
 を纏結し佛教の勢力を維持し得たる者にて今尙餘風を亞細
 亞に存し祭禮の儀式も諸經の詞節も僧侶の品級も管長の職

權も皆な悉く聖公會の規則を摸し堅く之を守る故に存名の
 ウチルテール Voltaire 及ウチルテール Voltaire の如く無宗教者は聖公會
 を駁撃し聖公會の儀式は佛教の儀式を摸せし者なり杯と頻
 に悪口を吐き雖も是は証據なき趣言にて確に佛教の儀式は
 聖公會の儀式を摸せし証據あり今レムザ Romanist 氏の亞細亞研
 究書第一卷に在る説を引て順序を述べ左の如し
 紀元後一千二百七十二年に元世祖忽必烈の使節羅馬に入り
 法王に謁見し終りて數年間滞留し又た伊太利國ヴェニツヤ
 Venetia 府に産いボーラ Lolo と云ふ兄弟兩個が達靴の貴族を羅馬
 に迎へ達靴の貴族は法王グレゴリヨ Gregorio 十世の饗應を受
 け土産と爲て種々の寶物を賜り聖ドミニコ門派の行者を多
 く作ひ返る

一千二百七十四年に忽必烈の甥がヘルシヤ Pagan 國アバガニ
 帝の使節と成り十六名の從者と共に羅馬に入り其中の二名
 は熱心に天主の教を信じ數多の主教の目前に於て洗禮を授
 る是は佛國里昂に聖公會の大會議の在たる年なり
 一千二百七十六年にヘルシヤ國アバガ帝の使節が復た羅馬
 に入り法王シヨアンジュ十一世の饗應に預り數年滞留し羅馬
 の風俗を調べ法王ニコラ Nicolas 三世の時に至り聖フランシス
 コ門派の教師五名を伴ひ返る
 一千二百八十五年に忽必烈及其甥ヘルシヤ國アルゴン Arghun
 王が羅馬法王及佛國皇帝の許へ使節を送り回々教人の猖獗
 を防ぐ策を求む是は忽必烈が深く考たる事にて此より凡そ
 二百年前に歐洲諸國が彼野蠻蕃の回々教人に壓制を受け天

賦の自由を失る時に當り羅馬法王は万国公法を説て歐州諸國の開化を助け佛蘭西伊太利英吉利日耳曼等の帝王は小亞細亞に在る基督の古跡を守る爲め夥多の軍兵を出し殘害暴行を極る回々教人の狂勢を挫たる事あり世に之を十字軍と稱す此事の詳細はギゾーの支明史を見て知る可し斯る例の在に依り忽必烈は羅馬法王及佛國皇帝の許へ使節を送り回々教人の猖獗を防ぐ策を求め以て野蠻の弊風を拂ひ開化の基を立んと欲たる者なり

一千二百八十七年に聖フランシスコ門派のモンコールピン Moncorin ショアン師がベルシヤに渡りアルゲン王の座側に在りて眞理を説き群臣に基督の教を傳へ一の道徳を注入し愛國勸王の心を固め富國強兵の基を開き二年を経て師は天竺に

趣き此國の人民を教化し進で支那に入りカンバル Candala に止るカンバルは今の北京にて有名なる都會なり師の支那に入し時は元朝六代成宗皇帝の祥興廿八年なり一が成宗皇帝は大お喜び忽ち首府に二箇の天主堂を建築し各地に教會を設け人民に福音を聞く可と觸れ示す之に依り人民は蟻の如く群り來て大に感じ二年の間に受洗者六千餘人に及ぶ併し中には是までチストリヤン Nestorian 論派の者も在り且ショアン Juan 師と同じ血脉の小國王も在り又此小國王の從者も多く在り

一千三百七年の春ショアン師は法王クレメント Clement 五世に建白し主教派遣の事を請ふ同じ年の秋に至り法王は之を容て七八の主教を派遣し且ショアン師をカンバルの大主教に

任す師は示來熱心に基督の教を傳へ支那に三万余人の基督
 教人を殖し一千三百三十年に至て世を去る法王の命に依り
 師の後續と成て來しカンパルの大主教は佛國に産れ巴里の
 大學校を卒業せし博士にて名をニコランニと云ふ
 支那邊境に基督の教が弘り之と同時に中亞細亞の諸國へ聖
 トミニニコ聖フランセス等の門派の教師が渡り基督の教を
 傳へ數多の人民を眞の道に誘ひ偶像の暗黒中へ天主の光
 を放ち且つ歐州基督教國の帝王は回々教人の猛勢を挫き野
 蠻の僻風を拂ふ事に尽力し一時は回々教人の爲に聖公會の
 傳道士と各地の良民が壓制を受けて亞細亞と歐羅巴の交際を
 斷に至り雖も二百年を経て喜望峯の近傍に一條の海路を發
 見し交際の便利を得て遂に回々教人の猛勢を挫き日本は利

義輝將軍の時代に至り聖フランセスヨカベリヨ Francisco Xavier
 師が遠く日本に來り大に基督の教を弘め師は止を得ざるの
 事ありて支那に移り雖も示來イスパニヤ Isidoro Velasco ガル
 Portugal 兩國の宣教師が相續で日本へ來り各地に教會を設け
 數多の人民を教化し日に月に信徒を増殖す此事の詳細は明
 治十一年日本太政官に於て翻譯せし歴史にて知る可し
 斯の如く基督教傳播の經歷を舉る事は他の目的に非ず支那
 天竺其他中亞細亞諸國に古く基督教が弘り婆羅門教及佛
 教基督教の聖書口傳祭禮儀式等を撰す便の在し事を知し
 る爲なり請ふ讀者は之に依て婆羅門教及佛教の經傳祭禮儀
 式等の習基督教と相似る箇條の在は全く基督教の經傳祭禮儀
 式等を撰たる者なる事を知る可し

兎も亦も右に述し如く三百年前足利末世の時代に在り日本
 に迄も聖公會の傳道が波及し百年の後に於て他國と交際を
 絶ち徳川幕府が日本の政權を取り三十年間に聖公會の日本
 の聖き先祖を天の義の爲に殺されたる事は人の知る如く數
 へ難き程に多し斯く大勢の信者が命を致し信仰の証據を立
 し故に世界万国に於て日本教會の徳義は高く響き天主の聖
 慮と云ひ乍ら其后二百五十年を経て維新の時に再び万国と
 交際を開き不思議に聖公會の勢力が興れ致命人の血は奉教
 人の種なりと昔時聖公會の學士テルトリヤン Tertollian 師の云し
 語に符合し僅の間に基督教が日興本全に弘り基督教の信仰
 力が輿論の力と成り佛教八宗の教理と僧侶を改る非と成り
 事は人の目に能く顯る尙ほ當る可き御母御事は聖公會の相

通功に依り日本の致命人の相通功に依り日本全國を照す可
 き光の結果にて是は目に見る如く頼母御事なり
 是れ即ち東に於て出る星を見たり 馬竅二章二節

世に光り來れり 約翰十二章四十六節
 世に出し都の人を照す光り 約翰一章九節

眞なり 約翰十八章卅八節

吾主基督きたりたまへ亞孟 黙示録廿二章卅節

明治廿二年一月廿四日印刷
全年全月廿八日出版

定價金六拾錢

兼印刷者

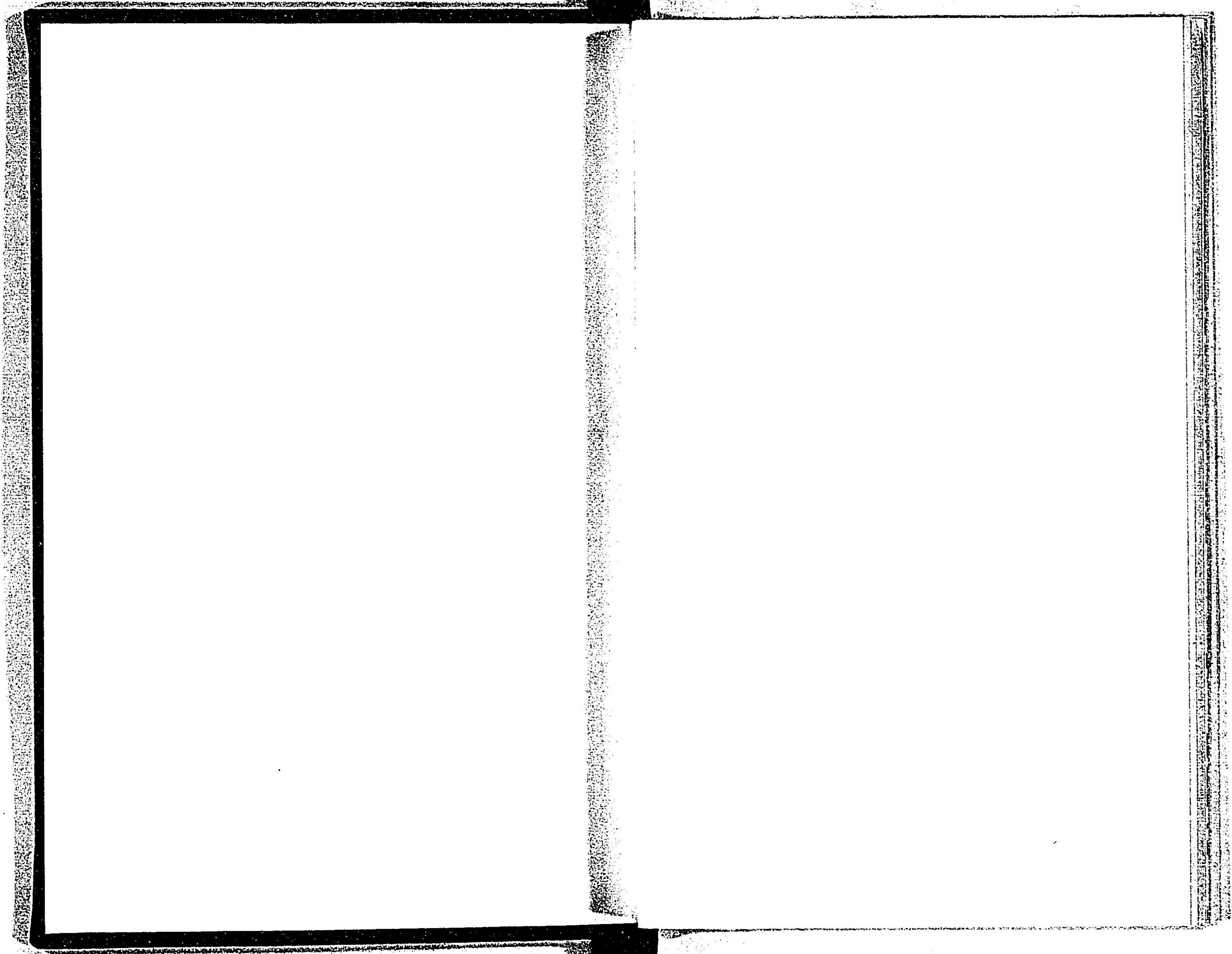
京都府下京區第四組
菱屋町二十番戶平民
加古義一

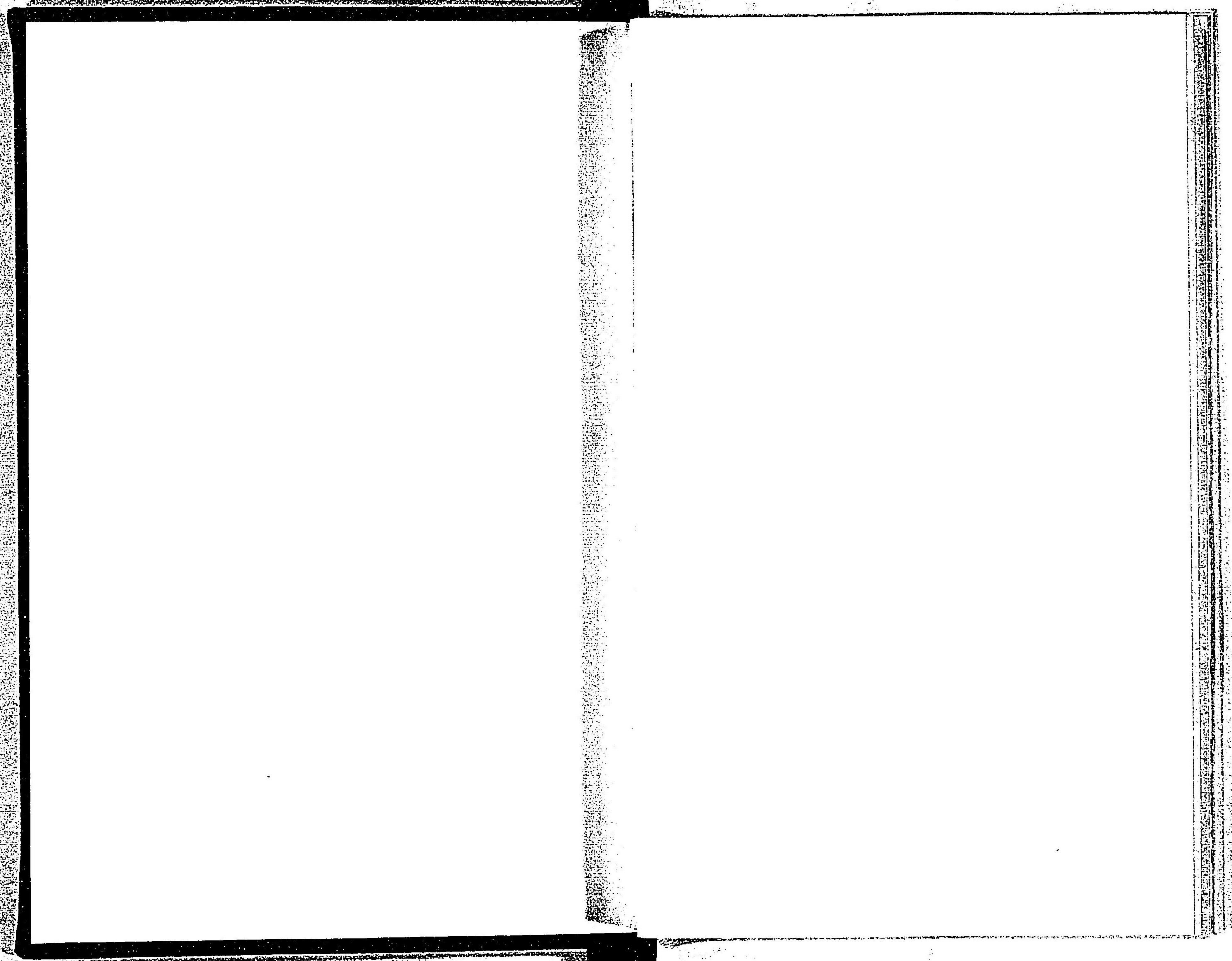
發行者

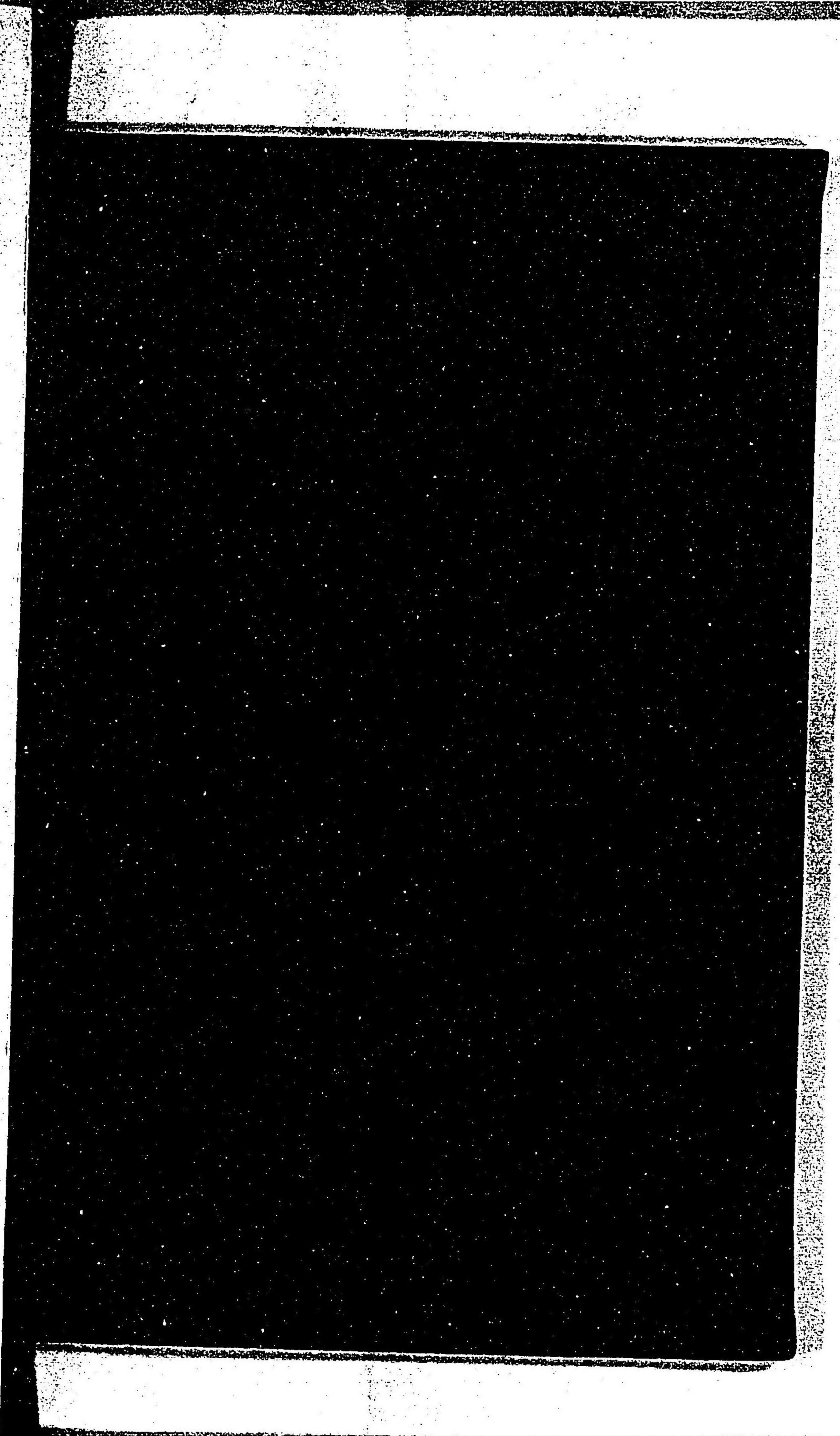
清水久次郎

京都府上京區第廿七組
森之木町廿六番戶平民

2.17







17
147

Ⓜ

013739-000-1

17-147

婆羅門教論 (仏教起源)

加古 義一/著

M22

ABA-0225



